

寛政録

八

昭和五年八月上院起筆

特別
14
1919
425



寛政録八

昭和五年八月上浣越筆



○支那の滑枕等文を輯めたる方に滑耀四冊あり、國
 あり屋所おのち、石川丈山千波をよむ一冊あり、
 焼痕あり、丈山漢つて焚ききまんと福宮さまを
 めの定本を披し甚辛しきことを出き深き焼
 痕ありが故に却て珍とせしむるも奇と認
 め

○白川樂翁自著の歌集より七きふと任吉
 百首を合綴一冊とし、字を抄り来り示すよ



(中托委館物博室帝) 犬 狛 戸 瀬
藏 所 窯 岡 星

あり合指動き勝めて架守のよのそり、よもぎふ
集の序文と共に三十二枚仕す百首の標巻を
併せて十一枚、往々朱筆を以て誤字を正し、所
あり皆楽蜀の千づかき所也、巻首も

朱津留

の朱印を捺す、素名の宮名家よりと
ましく表紙にちりしめ、家の紙を標

題公のちりしめ、西邊の厄に罹りたることあり
と見え、各紙の病を存す、入紙も七巻を
を改めんことを切す、余が架守の名家の由を
敢て少からざるも、こんちも珠とまじし、便る
五十冊也、加太判吉の珠什よりし、よ、約人
致し、余が千の流り

藤原

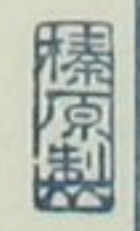
○前巻に書師の藤原地小山田に就て藤原志
らす所あり、その田舎の歌集部作を皇紀に
就て二の歌をも引かんとし、書物を換出する
は、懐く果てさるしとに、今披し得て小山
田の歌を換す、その歌首あり、去歌七一首あり、
田舎の歌は、くねいんれと名く、歌首の歌の中
に、楊由之とあり、つん立ちて、藤と探ん、時の歌
二三首あり、その一書は、楊由之、小山田の楊
とん人をも下紙に録し、其後、初を田舎とお
とつ、このことをあつ得る楊由之、この実跡
何の定才し、その歌を左に抄す

楊由之と、ちりし山田の山ありやとを千

出川を己らうと輪瀬のふゆくはとまゝの
花の木とちみなるうのろひと風さくはけ
まふのあかふかふるまゝの雪とのま

ちの雪をたもともあつ見えきり
枯藤にいたのまのききなる木下流丸丸
くぬあつきりちりこふさまいんあか

山さくらまきのあや雲をわけたつら
まの雪あふまのうけ
山あつきりちりこふさまいんあか
ちの雪をたもともあつ見えきり



此集の文句のゆゑ由之に送る文一篇あり山由
おつれと花をえしう契を結ひ程行をきり
ふのとえくさう良寛の死を悼みみま
た女子の身まわつるを思ふは梅みの文
一首の歌を添ふ

一筆なまなくぬるまをふと一入
かてい良しあは袖ぬら舞ら
とまう、田舎と由之と交りい山由かき蝶を
ことい如めてあり得なま他に歌集より得る

○余が山由の記に山由の流を掲げたるが深山
の種々倚置のあつて例としよあ保に霧の山

女仙の伝説を七の一七版に上げても、その手よ入
れり。これに我鳥湖山人が好むもの仕事あり、二枚の
繪あり、一枚は文晁の名山圖なり、我鳥湖山人を繪す
一は、女仙推すに合するもの圖あり、女仙を
心とて戴き、胸を鏡とてかく、陪從の婦人、梳を携
へるもの、琴を抱くもの、瓢を執るもの、皆る画手
を異にする、枕山の題あり、我鳥湖の詞後云々
余嘗て我鳥湖山中、有女仙、界而雖未信之、終不
能予憶也、客冬、漢友人杉浦多氣、志所著
西海雜誌、述其余所夢、此合、即の謂之、
天因其好相、謀合、志一回、以度于世、今
歲辛酉、西丁、神武天皇踐祚、千支、追思盛焉



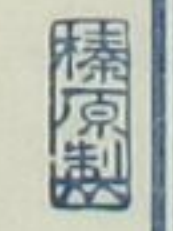
乃本回傳鑑之橋本云、

我鳥湖山人木雄
香山之序

餘の外、文六百あり、多氣志が天保七年、西海雜誌
登山の折、杉浦寺に投宿の折、方丈五、客和あり、
拍琴をえ、はるを、筆を、し、
る、僕五助が山中、一日、
又、鳥のしき、婦人の衣、波衣、
此、梳を、
秋、血、未、
中、未、味、
志、か、ら、す、他、言、セ、ハ、効、あり、の、と、す、と、江、志、

を漏らすことわざなど世に傳へたるものありし時、其の姿を現はし、概と述べて、その男の心、呼び出さるる美人を、見入らぬ、その心、定作の、るを、齡二十と云く、未だ、知、合、り、も、な、ら、ず、と、云、く、若や、き、さ、る、男、の、世、に、仙、の、概、果、し、ら、若、返、り、の、效、あ、ら、し、と、い、ふ、多、氣、志、説、く、所、の、大、意、也、こ、の、太、古、の、人、為、は、存、す、と、の、傳、説、を、し、余、が、小、山、田、に、於、て、習、ふ、に、山、女、と、い、ふ、異、を、果、然、と、す、む、も、彼、是、を、考、ひ、合、ひ、し、め、少、の、取、扱、を、受、け、お、務、め、仙、女、の、事、に、日、本、神、話、の、内、に、誤、り、可、く、し、る、も、也、此、回、は、神、話、の、取、扱、を、添、く、る、と、の、も、外、國、文、を、譯、す、時、に、此、條、を、添、ふ、も、可、也

七月二日執筆



○毎年夏時三伏隨筆の稿を属するを例として本年亦去月廿日、定例に従ひ、隨筆日十編の、と、未、と、著、さん、と、特、に、人、事、に、就、て、筆、を、下、す、毎、日、五、枚、十、頁、を、込、む、を、日、課、と、し、約、五、十、枚、或、は、早、稲、田、の、教、務、に、其、の、り、て、故、人、と、な、り、た、り、と、の、少、から、余、僅、か、に、三、十、餘、氏、と、異、ん、び、其、の、性、行、逸、話、を、録、し、あ、の、の、評、論、を、下、し、以、ん、だ、と、す、と、文、の、間、を、主、と、す、と、云、に、満、ち、る、も、の、多、く、は、林、料、の、之、し、き、を、未、だ、向、も、せん、尚、且、進、つ、て、添、加、を、勉、ま、と、す、也。

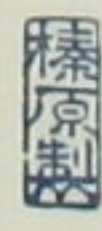
○偶々暑熱を忘れんとし、涼室に就き、加味中の原本を抽いて讀む、壺漢拾雅の二冊、多

く傳文房の雅文を輯、酒、煙、茶、葷、及、小煙
の一文、最、七、致、波、を、受、ふ

煙以趣勝嗜者衆矣夫嗜煙者嗜其趣耳
趣勝故嗜之者衆聞之神仙不食煙火物
物從煙火中出尚不食之何況於煙然世之
不吸煙者未見其得為神仙我又安能以不
可死之神仙而奪我煙趣也煙草不見經傳
宋史載呂宋回產淡巴菴即今煙草者
是煙以氣行而更以味著故鼻受者直
以口受煙以色顯而特以類傳故目辨者
仍以舌辨考其產曰建曰衡肥瘠殊而
產亦殊建其衡其較著也問其制曰生

曰熟物粗別而製亦別生煎一既其名也
五方自為風氣安能嗜欲皆同獨至煙而東
西朔南海內無不餐食霞之輩萬姓各有
性情夫豈效尤能偏獨至煙而童叟男婦
目中無不飲霧之人待思生於杖活一匙列
手養似木雞得煙而想入風雲其之悠揚
上下覺大舍細入呼吸皆通靈合七梳不如
金縷半日因矣談鋒由於氣壯衆客盈前
形同土偶獨得煙而神流肺腑其之吞吐翕
張咳玉噴珠洪纖畢露口官鬆三升不如玉
塵一咽矣紫絲宛在以為無足輕重及至
雲消雷散而不見跡尋踪無從措手然後

知天懷洞典生俱承者、此外更無他物、以均及
 未嘗以為不恒、繫患、一旦含英咀華、而寤
 思夢想、刻不可離、以是知宇宙內、實獲在
 心者、此中確有別腸、至若醉能醒、醒能醉
 飢可飽、飽可飢、此皆煙之功用、我不言々
 其趣而已。



平内古道通印



梵文
 道遠
 有辰
 銅印
 羊鈕



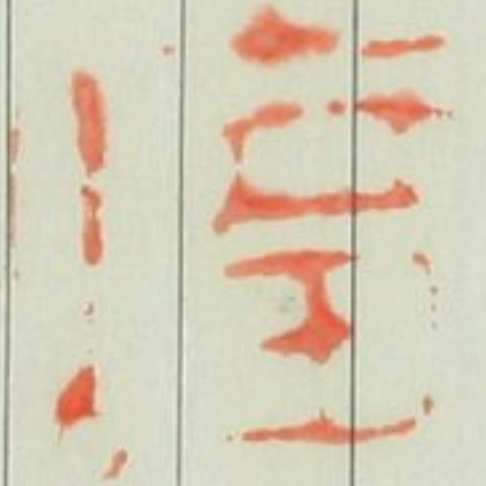
梵字

三打井海入

合田
 富原鑄



合田
 文庫



石印



林瀬日年
 心

會田富原鑄

銅印

○酒席ハ厭ハシクハ凡左ノ癖有リ日本ハ厭ハシクハ奴
ハ支那ハ古ク張府ハ奴ハ有リ

自己具尽 輒便起身

誇勢利 滿口胡茶

心屬一人 四座不顧

推弄貨殖 不暇奉杯

奪席正 談情若無人

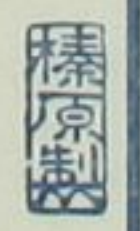
主席過卑 客坐傲岸

痛惡他人 控訴席上

強人歌唱 及唱不聽

不知音律 妄加褒貶

不論生熟 一味諧謔



志在侮至 遇饒必獲

不備樽俎 他饒自携供具

席上取果 喫一袖二

心本合貝 杯故意犯令

道聽塗說 突如親親

逢人訴窮 竟席不歡

持杯在手 到口復置

醒務未訥 解轉勞嘈

知人量淺 故罰深杯

附耳囁語 起坐無常

酒席ハ人格ノ毒保ノ窓人ノ所非ヲ知リテ平素ノ蔽

ハ之長ク自覺ノ癖ハ酒ヲ藉リテ皆出テ未ダ是ノ性

酒庫も、醸造も視る、酒屋を戒め、以上二十則に
 比する人格を傷め、そのまゝ、
 〇東京市に特別税として金庫に課税する、
 る、左の通牒は、概して、商人未だ家に金庫を
 備ふるに至らざる、其も時を度おぼす

金庫はおありですか
 それは何號でせう

東京市特別税條例 (拔萃)

金庫税

- 第一條 本市ハ左ノ特別税ヲ賦課ス
 三 金庫税
- 第二條 特別税ハ賦課期日ノ現在ニ於ケル課税標準ニ基キ納税義務者ニシテ賦課ス
- 第三條 年税ハ之ヲ二期ニ區分シ毎年度四月一日ヨリ九月三十日迄ヲ第一期トシ十月一日ヨリ三月三十一日迄ヲ第二期トス第一期ハ四月一日、第二期ハ十月一日ヲ賦課期日トシ毎期年額ノ半額ヲ賦課ス但シ賦課ノ定率アルモノハ其ノ折半率ニ依リ每期之ヲ賦課ス
- 第十六條 金庫税ハ金庫ヲ所有スル者ニ對シ金庫ノ所在地ニ於テ之ヲ賦課ス但シ左ニ掲ケルモノニ付テハ此ノ限ニ在ラス
 一、商品ニシテ使用セサルモノ
 二、金庫ノ外法高サ 一、二メートル未満ノモノ
 三、祭祀、宗教、慈善、教育事業専用ノモノ
 四、公共團體及産業組合並産業組合中央金庫事業専用ノモノ
- 第十七條 金庫税ハ左ノ課額以内トシ第一期ハ六月三十日第二期ハ十一月三十日限り之ヲ徴收ス
 外法高サ 一、七五メートル以上ノモノ 一個ニ付 年税 三十圓
 同 一、三九メートル以上ノモノ 同 二十圓
 同 一、二二メートル以上ノモノ 同 十二圓
- 第十八條 金庫ノ取得其ノ他ニ依リ納税義務ヲ生シタル者ハ其ノ事實發生後七日以内ニ金庫ノ所在地、外法高サヲ金庫所在ノ所轄區長ニ申告スヘシ所有權ノ移轉其他ニ依リ納税義務消滅シタルトキ若ハ申告事項ニ異動ヲ生シタルトキ亦同シ
- 第三十一條 納税義務者本條例ニ定ムル申告ヲ爲サ、ルトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ區長其ノ課税標準ヲ決定ス
- 區長前項ノ決定ヲ爲シタルトキハ之ヲ納税義務者ニ通知スヘシ
- 第三十二條 詐偽其ノ他ノ不正ノ行爲ニ依リ特別税ヲ逋脱シタル者ニ對シテハ逋脱金額ノ三倍ニ相當スル金額(其ノ金額五圓未満ナルトキハ五圓)以下ノ過料ヲ科ス
- 第三十三條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ニ對シテハ五圓以下ノ過料ヲ科ス
 一、本條例ニ定ムル申告ヲ爲サス又ハ虚偽ノ申告ヲ爲シタルトキ
 二、第三十條ノ質問ニ應セス又ハ帳簿書類ノ提示ヲ拒ミタルトキ
 三、正當ノ理由ナクシテ市制第二百二十七條第一項ノ検査ヲ拒ミタルトキ

東京市

金庫の高さ一、一二メートル以上(曲尺約三尺六寸九分)のものには金庫税がかかります
 そろした金庫をおもちのお方は八月十五日限り所轄區長にお届け下さい

○天正頃多くの大名がキリシタンに帰依したが自分の初耳
かあるのの當時の名醫曲直瀬道三もゆ信ある一人に
あつたと云ふ事也。姉崎博士の近著や支丹傳等の
自序の内に左の記述がある

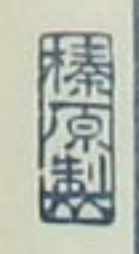
最も重要であつたのは、當時の名醫曲直
瀬道三の帰教であつた。彼は元禄傳に
つた、還俗し、教習と朝野に言人から
九、八万人の門人があつたといふ。教師に
ドが丸物から京へ来て、道三の診察を受
けてゐる間に、道三が教法の善きと及び、
マの不滅といふ教に感服し、終に洗
禮を多しむるなりキリシタンと名のつた。此の

事の漸々の評判を聞き、朝廷から多量
を棄てよと命じられたが、之に應じらなかつ
たと傳へたる事也

○日露戦役、日本が勝つた。世界の窮乏を感し
た。その原因に就いて、西洋人いろいろと考へたが、
ある原因を握り、飯の物も、握り飯の中に入ら
ない、梅干が入つてゐる。これが日本の國旗を象徴して、
これが日本の兵士の帯は、國旗を胃の腑に送る。も
ろゝんが、梅干が、飯の滑杖である。あ
る、梅干を入れた飯は、古来陸中の兵糧で
ある。梅干は、便利のよきものである。外國兵士の
兵站が非常に出る。日露戦役、梅干が伴はると

比お女房の金で酸味が濃いの多くの人の意見をまねが
 が自分たちの例年つける梅の酸味の強さを色か
 濃く酸が濃いのを可とする。二年紙、三年紙とする
 こと肉が酸かひきつて酸が益々多くなる。本等の家
 するの人は意見あつて、江戸市中で用ゐるのハ甚だ好ま
 るい。

日本人がハ、急まんたる前等こむいしが日本
 の国民性ハ死との難い関係がある。どちらが原因
 があるかハ知らるゝのが日本人ハ潔癖ハ国民性の
 一つハ、神事ハ穢れを厭ふから道守かんれと云いて
 ゐるが、全身浴ハいんえを貴人も日考の操習
 び、世界のどこを尋ねても日本のことハ風俗好ま



ハるい、急まんたる前等こむいしが日本
 なる。西洋の都市ハ、梅の酸味の道徳を
 構ハぬハ、自然儉約ハ多々をハるい。
 そこは行くとも日本人ハ、五ノ入浴を厭ハるハ、氣
 がからなくも溜るゝものハ、西洋人ハ一月月入浴を薦
 してあつても平氣である。強々入浴を勧めると忌
 ころん日なむもある。此ハ風俗好むある習俗が人の
 身体ハ、先ハ乾燥者を及ぼすかといふ。日本ハ、
 く衛生的ハ、効果がある。日本ハ、
 駐在ハ、医術の大家ハ、ヘルツの如きハ、日本ハ、
 マチハ、羅くものハ、少々のハ、全身浴の物ハ、

うと云ふはとすくしある。リウマチの病因の一つは
バイ菌が皮膚を侵す。在るは皮膚を汚穢
と毒すること。確かに此の病を惹きたる因
と云ふは相違ない。西洋はリウマチの疾病
が漸く盛んになり、日本人の志像外はと西洋を
知つてゐる。処方の醫者も、日本に全
身浴の習慣のある外、浸るに當るゝるこ
とが亦世界中一に、んが亦リウマチを治すこ
とあること。申すじもろい。すは皮膚病も
どい身体の不潔から生ずるといふ。腕の生
ずる臭氣、所謂ワキガ、其の一例であつて
西洋人は殊に多い。全身浴を勤め、衣服で

腋窩を磨き、起る。起るは日本人は
較的ワキガの少ない。又身体を洗ひ、汗を
乾かす。支那人は、支那人は、支那人は、
一向に氣をかける。邦人の異臭を氣を
つる。神経が過敏である。えんも、
の身体を洗ひ、浄め、から、異臭をいどく
感する。この見ざるを得ぬ。神経質
ゆする譯あり。

○京都の貴重書、影本、刊行、今から、
田の配本として、廿二本の、浄瑠璃、
と配本した。えん、貞享二年七月十日、
野の序のある本、稀覯のもの、

内容ハ凱陣ハ島、唐、藍、深川、世継、曾我、伊呂波
物語、平安城（一名平安城都鬼）三社説書（一
名三社説書の由来七巻十五巻）を輯められた
のであるが、此版本ハ大正五年、京都の色紙入出の
を京都大島の四文科研究會に贈ふ以外、か
つて世に出たことのない書である。此内、西鶴の物
一は唐の久喜改唐をあとにこんだといふ三巻、
収まつてゐるのに、珍價がある。西鶴三唐の心
があること、いぢれもあつたといふことも、穿鑿家
が見たことのないものである。その自心を収めて
西鶴のつらさ、唐をいへるの心、西鶴の自家
宣傳の爲め、持て、形半の心つて出したよれば

森田

と云つてゐる。西鶴集といふのは大正集、歌集と
自命して名を、序文にも大正集の形が大きく、
帯は便ひるゝか、不形、とあるけれども、大
正集と、大正集と、大正集といふ、俗制、
托して、此の心、いふを異、此の心、いふを、
め、この心、いふを、西鶴集を出版してゐる北
澤前、あつた、森田、大正集の出版と、いふ
る、全体、西鶴の心、いふ、加賀、様、いふ、こと、
か、いふ、唱、来、を、いふ、いふ、いふ、いふ、
く、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
と、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、
や、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、いふ、

啓
あつた
二月
の三

リ而各ろ味のあつたものひいさへも先づ侍いらさぬの
れ其故はあつたが西洋の咳唾ともあつたが好
烟^煙と称してさういふ不思議もある。此の影を
存^存井北の影の影は一冊の解題が附してあ
る。

○自分酒を嗜むわけは西洋の酒を割合味をま
るへ。激酒の取り分け好まるいのか人から定めて来
るといつて其の愛介に因りてある。山井スキーが
さういふ人多くさぬ況人やさぬさうも此の酒は
拍のあつた此の音楽家の通多美佐が訪ねて来
るとアブサンといふ酒を持来り。此の酒は
二滴とくしてさういふ飲めとさういふやつである



と、秀動のさうくも興つたが、氣味がさうくして、其杯
をさしとせり止んた、其の折来合ひしてあつた。若い
音楽家が、是非生む飲みたいとさういふ日本酒を
飲ませると、更さうくとさういふ此の酒を持来り
此人が之を割してさういふ若さういふ忽ち酔倒し
て吐吐を催し昏睡し此の影を動かすことと成る
一夜吾家にて泊せしめられた。之を見ても其の強烈
さういふ飲来りた。此酒ハハ十パーセントのアルコールを
を合んむるといふからさういふと全部アルコールと見る
べきよめだ。西洋のいづれも此の影を飲むさうい
ふ影の影もさういふが、大体の酒は酔を催さる
いやうなドラムカードや直交機行忘るさういふ羅つた

よるが口をすまふか、高俊の社令の田ひ
●まのいふあるまいか、大きな瓶に入つて、價の廉
である所から考へても、労働者級のよと思ひ
る。

八月六日記

○早稲田の故人を段々書いて前巻の終向の無
くするに、爰に書きつくりたい。

志賀重昂の札幌高等農林学校出身の学者が、
ついでに譯文が、寧ろ地理学者として名を持
つ。氏の早稲田の受持の支那の地理書があつた。
氏の趣味の、亦詩的の地理を講ずる特長があ
り、自身大の旅行家も多く、其の體験を講
し、此の故、君の力ある辨舌と共に、海義の

生来の躍如たるものがあつても、君の體験が大きい
高松傑の如くあつた。君の教を受けた人の流を少
くのいふ生中、本松友の異風の事、よの著
眼し、君の高松傑の男だが、この生んぶ名を
何んときあと思はれると、丹波の出身と云ふ
と、丹波の大江山の酒類、童子以上の高松傑
の如く、喝破したる、其の生い、氣を奪は
れ、黙して、まの井上雅二氏があつた。君
の地理の海義の、政治も経済も法律も政宗
教もあつたことが、交り、心を衝いて、出さる
が、生きた、海義の知識を、まの海義の、
君の自から、海義の知識を、海する、殊に

生来があつて、往々里枝に旅中の詩をも録し
此印度洋を跨つた時の時風光などの説の
めりも、~~詩~~詩があつたか、説の難い高の詩を以
つて稱つた、母東の海を聴くは子生の今あるは
其詩を語してある、~~詩~~詩があつて、其の計自分の為
めと云ふと明論、~~詩~~詩の七絶はあつた

三帆多風動晚涼、澳甘南去即其
花不知今夜何家泊、月高浪白海

道洋

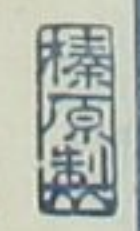
自分と君との交りの可き早くからある。君が鳥居地
に住した頃、晩餐に招かれたことがあつたか、此の鳥居
地の邸に於て大さきものあつた、内心君の邸宅

東京

とて不似合ひあつた、風を抱いた、君との交り
七曾つて君が仰圖の新語、主筆なることを
頼し、君の勤板、奇藝の著、論壇を賑はしたか
美の二月、~~詩~~詩の期間であつた。自分の幹理
の下に在る文の協会に在る、君を煩ひして種
々の講演を聴いた。此の文化発展記念会とい
ふを協会の催した、君の著、其の基、~~詩~~詩の
こと、~~詩~~詩の内外の注目と云ふ、君の天然、~~詩~~詩の
趣味があつて、旅行の都がいろいろのよき
高、~~詩~~詩のことが例であつて、君の晩年の住宅
の壁にサハラ沙漠の沙が塗つたと云ふ、~~詩~~詩の
君の家を訪ふ、君の雑然たる某集物

コレクシオンに就て面白く読む事多し。其の常々ある
つれ。君の如き豪傑肌の人の自負が強く免れず
と他人の長を認めざるの事ある事ある。然れども
あつて公平にして自ら及ばずと思へば飽き其その
を称賛して尊敬を拂ふ人あつた。亡友吉田東
伍の大日本地名辭典の君の専門を関する著書
だが君の極力之れを賞賛して他力を止まらざり
つれ。亦之友坂口五峰の詩に服しては此人の詩書
の外書なる何物も掲げざると公言する程に
傾倒した。

早稲田の法科は多くの教授を迎へた中に奥田



あり

義人志村春太郎の事氏に殊に傑出したる事あり
と。物権法などの難課目を擔任した。奥田氏
何れも其の校に好評を博し法律家の奥田氏
ハ○学院大子の中堅であり、亦屢々政府の要局
を立つ法親の制定に與り、曾て東京市市長と
七奉けえん。君の人格の人が市長とも其素望
を認めえん。君が長壽を保ち得た事この市
長とせざるべき。君の勵勉があつた故と構まん
る。其の志村春太郎氏に有名なる漢儒者つと松寛
谷の子息の頭腦が明晰な性格が奇しく、帝大在
学中も早く偉業を抜き一級の頭領があつた。いつ
書生中の喧嘩でもあると大将とさる。校にありと

くが、交つてゐること如何も、法蘭達は凡采由、瓶夾
多、状人があつた、指いかゝ、舞臺、天恵が、落
荒、く、と、取、した。君の、晩年、の、甚、洋、徳、替
府に奉仕し、甚、洋、の、田、境、習、を、と、油、煮、した、こ
と、あ、る。君の、令、妹、山、田、吉、子、の、嫁、した。

田尻病次郎氏、今、計、検、査、院、長、と、し、て、亦、任、滿、の、者
と、し、て、い、え、早、稲、田、の、任、滿、の、科、目、を、受、け、持、た、れ、
君の、大、隈、侯、と、姻、戚、關、係、も、あ、つ、た、の、が、早、稲、田、の、教
數、を、取、ら、う、と、い、ふ、つ、た、の、も、自、然、の、縁、因、が、あ、る。君
ハ、方、の、矯、の、人、が、今、計、検、査、院、に、出、の、け、う、も、早、稲、
田、に、来、う、も、決、し、と、棄、物、と、藉、う、が、テ、ン、ク、の、徒、歩

徳原製

主義の、あ、つ、た。君の、任、定、も、田、尻、流、に、質、素、の、よ、
い、あ、つ、た、が、後、ぬ、き、の、交、え、の、場、に、あ、つ、た、高、價
の、絨、タ、ン、を、敷、い、て、ゐ、る、と、い、ふ。君、が、物、を、取、り、し、て、無
欲、着、て、あ、る、こ、と、を、悟、つ、た、の、が、あ、る。君の、酒、豪
が、あ、つ、た、に、は、早、稲、田、の、鹿、火、島、の、人、が、あ、る、が、鹿、火、島
と、い、ふ、名、が、あ、る、と、い、ふ。君、の、人、が、あ、る、が、話、を、交、へ、ると
義、理、明、晰、の、人、を、し、て、痛、快、を、感、ぜ、し、め、た。自、今、が、早
稲、田、の、回、書、館、を、替、へ、と、ゐ、る、頃、に、同、古、の、検、査
と、来、た、と、い、ふ。其、際、破、産、の、給、付、物、を、故、目、見、し
と、こ、の、場、相、續、に、置、く、へ、き、と、い、ふ。同、古、の、見、し
不、似、合、ふ、と、い、ふ。と、云、い、え、ん、に、任、滿、の、君、の、見、し
解、と、い、う、怪、あ、つ、た、と、い、ふ。斯、う、い、ふ、が、斯、う、い、ふ、解、と、い、う

政府所定の用者級の物品を換取せんとする
る多く違法のことがあるが、一笑いしることか
ある。

伊藤梯治氏司法官に終始し大審院の部長と
なるが、早稲田の初期より法科を教く。君の
厚の人望が職務より謹密であつた。自今、十年
時代から懸念が交誼に君の身を早めるも、統
いに君の命令をよぶ前、多くの場合私に君の出席
するが、君が例に私が出席する
と云ふは君の出席し、一ツの斯く、
認めようとの意、
君は司法

藤原

官以外に餘り交際が無く、身を持すこと
と謹密であつた。私が出席するが、
と云ふは君の出席し、一ツの斯く、
認めようとの意、
君は司法

文科の初期より、印度哲學の講義、村上喜祐

藤原

(又云居士) 前田慧室(又云居士)の兩師の印度哲學を講せんとす。而師の共い真宗流の學僧に斯界の存信があつた。村上師と自分いろいろの縁因を交つた。師は、斯る苦學の人を修業時代より我が國後に来り、自分の郷里にある無為心寺（在藤原）を講せしめ、佛舎あり、堂あり、之を居して當時天大の光を傳へしこの僧（實と實と云ふ）、或る時、新保の某寺に身を定めて、凡そ衆僧の如き、親務を執り、此こともある。師が佛敎大経論（務）を著し、本山日本經寺の忌諱も觸の破門せん。此の時、自分の重患後、自領人表に於て、吾中のあり、此書を觀讀し、此の其時、深く師の儀

論の莊重より一宗一派は偏せざる客観的態度の
敬服した。師の名をうり本山の忌諱より觸れしか登
々揚つた。嘗て修祿寺の漫ふるに解^一述^一の時
師と白隱禪師の自^一廬^一所^一の教を云ふに
こともあつた。東山の一^一郎^一が歿した時師は法名
を清山と師の云はるゝ山といふ人の交りかま
いか、縁を内^一其^一人の事いふへ疑うからと^一撰^一し撰
ひん法名は廣^一直^一院^一正^一論^一居士とあつて天下之
記者は山田^一照^一お^一從^一ら^一む向^一き^一があるを、自^一分^一の深^一
き古人に此^一語^一は佛^一果^一云^一ふももろく佛^一典^一の氏^一終
から取つたのである。前^一回^一師^一の傳^一説^一の人の日本^一
古刹の記録類^一目^一をもつて精^一一^一かつたを、自^一分^一が

東京

圖書刊行會を^一推^一進^一し^一た^一時^一寺^一に^一関^一し^一る^一文
獻^一の^一師^一の^一傳^一説^一を^一撰^一じ^一た^一時^一寺^一に^一関^一し^一る^一文
の^一語^一を^一採^一り^一た^一こと^一ある^一が、師^一の^一何^一時^一に^一歿^一せ^一た^一時^一に^一待^一ち
何か^一變^一化^一の^一事^一と^一も^一ある^一が、^一師^一の^一何^一時^一に^一歿^一せ^一た^一時^一に^一待^一ち
を得^一た^一

同刻の

越井時冬氏、早稲田の先^一に^一知名^一の人^一である、君^一は^一高^一寺
高^一業^一の^一後^一に^一長く^一身^一を^一守^一り^一て^一早^一く^一文^一藝^一士^一の^一位^一を
贏^一つ^一得^一た。君^一は^一伊^一勢^一の^一本^一長^一宣^一長^一の^一血^一統^一を^一い^一き、^一國^一文^一
を^一法^一く^一し^一た。兼^一て^一日^一本^一の^一工^一藝^一を^一精^一一^一かつ^一た。君^一
母校^一の^一教^一鞭^一を^一執^一つ^一た。高^一科^一外^一四^一百^一あり^一て、^一學^一生^一
の^一考^一る^一高^一品^一を^一サ^一火^一集^一し^一た^一時^一に、^一君^一は^一主^一として

努力さん。而も彼、^{吉時の}圖書館内は置かんとおれ、
自分の彼長時代はあつたから、君と接すること
が頻りにあつた。君の趣味の人びと、^{吉時の}あつた。君は
故味談を交換し、圖書刊行会、各種の
稀書を編纂し、^{吉時の}君は、^{吉時の}美術の
を撰書し、^{吉時の}君は、^{吉時の}所が、^{吉時の}

法科の教鞭を執つた人、鈴木宗言氏の前につくと
とを忘れたら、^{吉時の}君は、^{吉時の}廣崎出身で、^{吉時の}高等の利
事であつた。早稲田は、^{吉時の}君は、^{吉時の}酒を嗜んだの、^{吉時の}自分
屢々其の相手とあつたが、^{吉時の}決闘人が

吉時の

東京

文科の初期、高橋五郎氏が、^{吉時の}テーンの英文の史
を教くま、^{吉時の}君は、^{吉時の}クリスティアン、^{吉時の}英
いろくの著書であつた人、^{吉時の}流時代、^{吉時の}誰か
人であつたが、^{吉時の}当時、^{吉時の}校を、^{吉時の}困難時代、^{吉時の}兄
る、^{吉時の}君は、^{吉時の}教、^{吉時の}一時、^{吉時の}一四二
田と、^{吉時の}君は、^{吉時の}高橋氏、^{吉時の}入
不足を云ふこと、^{吉時の}君は、^{吉時の}先生、^{吉時の}車
学問の便を論ずるやうな先生、^{吉時の}教を受け

文科の初期、高橋五郎氏が、^{吉時の}テーンの英文の史
を教くま、^{吉時の}君は、^{吉時の}クリスティアン、^{吉時の}英
いろくの著書であつた人、^{吉時の}流時代、^{吉時の}誰か
人であつたが、^{吉時の}当時、^{吉時の}校を、^{吉時の}困難時代、^{吉時の}兄
る、^{吉時の}君は、^{吉時の}教、^{吉時の}一時、^{吉時の}一四二
田と、^{吉時の}君は、^{吉時の}高橋氏、^{吉時の}入
不足を云ふこと、^{吉時の}君は、^{吉時の}先生、^{吉時の}車
学問の便を論ずるやうな先生、^{吉時の}教を受け

かくまゐりと幹事とあり読めりも強弱し此の如利
 欽方信成と云ふ校との縁が切れ大西祝氏が其
 の後を承けて教へた。君は哲學家の本領があつ
 て英文学史の的が鋭いであつたが往く所として
 可なりと云ふも君の大学の学生は満座を博
 した。

…… 篠 ……

慶應出身の笹屋乙次郎氏を文科で三三
 トンのパラダイス・コストを教へた。笹屋氏の学
 力いじんあつたあつたのか分らんが、昔の生受が甚
 しく、あんなに卒業の時にあんな人の罷
 らぬ証書もあるの、昔の若折れと、当時

篠

…… 篠 ……
 …… 篠 ……
 …… 篠 ……
 …… 篠 ……
 …… 篠 ……

……

……

……

……

……

郷食庭典三印(望村)氏七早稲田の津重が課外に
近松を清しにことある。その頃早稲田がそのあとか
細い分かん近松研究と云ふが創まつて、君の早稲田
の海軍を学生を相手する近松研究をしに、ある。出
生の中より後、竹松研究で知られ、お谷三彦、土
居春晴らとあつた。恐らく郷食庭氏、此の
研究の先輩にあつた。君の親族の間
係は、瀧初彦氏、鳥居清忠氏、友入
と、三倉天心、橋本雅邦、氏らとあつた。中
野直道(氏)の友人中、親戚、君とあつた。関係があ
つた。君の三馬肌を引いた滑杖名の筆を、王赤し、
お父の性、格、江、江、人、酒と、酒と、酒と、酒と、人

を、壓、倒、し、君、も、津、原、三、三、坊、の、坊、士、を、弱、し、し、君
か、向、崎、の、住、居、し、し、時、墨、あ、か、江、澄、し、し、君、の、居、の、あ、
浸、つ、て、ぬ、る、の、の、あ、は、自、然、と、し、し、杯、を、把、つ、て、あ、る、の、
ハ、散、り、危、険、を、冒、し、し、故、い、又、出、か、け、れ、あ、る、(君)氏、と
して、吐、然、と、し、し、め、れ、し、し、も、あ、る、。君、の、晩、年、劇、演、家
て、お、ん、の、自、分、と、君、と、の、交、り、の、既、刊、の、地、誌、と、あ、る、

郷食庭典

法科の初期より富井成幸・梅田次郎・本堂一平

法科

の三氏も講義の義を来るといふ。今富井成幸は、
他の二氏の鬼籍に入り、三氏は兄弟をなすも、
かありて、麻布の鳥居次郎、本堂氏の部、三人の
今時が、本堂氏の義父・成三郎、
維新の吹官吏として、郷里に、
の、
社長が、
に到り、三氏今時の席に、
後人、本堂一平、八幡、
早く、
の、
した。氏、
編纂、
の、

関係

最後の日
の、
の、

いぢぢぢ
へきぢぢぢ
ぢぢぢぢ

この緯とくもゆるゆるのちやうと人であつた。君は稀な
兄の明敏なる法律家、外四、游学し、以時論文
に大なる教授を蒙り、此と云ふが、其の論文は特
に羅甸文の古く、此の第一層の款を採り、以て
君は羅甸語の素養があつた。このころ、僅か計り
の間の研究で自在に操縦するに至つた。この
ころいつかや或る定比の法律上の案件を蒙り、
て其の意見を出した。これが、君は私の質問を
すも終つて、君の考へる、どうも、いふのかと云つ
ふから、私の法律の解釋は、いろくある、君が、
云ふと、君は笑つて、さういふも、さういふ。君は、
側の利を主とする、斯く、爾と、被先の利を主



とする、斯く、爾と、此と、さうも、昔、君は、思ふ、さういふ、
口を衝て流す、か、如く、説か、さういふ、と、さういふ、
双方に、立派な、道理が、あつて、自分、さういふ、到底、判じ
て、さういふ、と、さういふ、か、君は、非凡の、頭脳、の、持主、
ある、ことを、此時、痛切に、感じ、た。君は、此、年、其、の、
総督府、に、奉仕、中、去、折、さういふ、と、さういふ、と、
さういふ、と、

王子金田中一氏は、任満子を教へた。君は、任満子、
として、さういふ、酒、飲、む、子、の、若、者、と、さういふ、と、
おん、と、さういふ、君の、酒、飲、む、有、名、と、さういふ、と、保
一、君の、自、遣、次、頼、沛、酒、飲、む、つ、く、め、の、生、活、を、

かと思ふと決してさういふ事をする面真面目な人
あり、君の教誨ハ笑面と思ふが、自分の千々石
しめる錫もある此の難があるが、君の常々笑を
湛くしてゐる人の無つた。元来酒夜の唐突、
笑も帯びず、
から、土子君のいかに新道の本家ハ其の心得が
あつたのであらう。君の家ハ生ハ其の邸
目宅の宏壯ハ庭の深ハ其の山ありつた。坐する
に坐して君を思ふこと、
人といふ思ひんさうつた。教誨は授ける君はど
うであつたか、君の教を受ければ人ハ心んとする
。



笑ひある。

奥の目大子懸備つ時代の同窓が英子を教く人が
二人あつた。佐久間信春、今井鐵大守の両氏がある。佐
久間氏の杉平康四氏の笑見がある。ことを受へた
のハ近年の事もある。佐久間氏の宮内時代から英子と
懇話であつたが、その教を受けし人の漢を極すと、天下
無敵と平ふ態度で、其の宮内橋立印氏が英子と
してゐる。譯書も多くあつたが、その誤譯を時々
教壇に指摘し、字義を解する、其の意があらうと
云ふ、今井鐵大守氏の自合と御國を同し、温順
の所及ハ中学の課程を刻命と修め、甲斐が

あつて、早稲田中子が入つてから調法がえんじ。此教授
が教師が休むと、必く補講する事とすつてゐた。そ
して何課と物をも補講し、の衝にさうする。今井
氏があつた。氏ハ是等の考の中心を重きとす
し。志かして何んともあつても、早稲田の英子教授
秀逸の増田君に此氏を推して、其の如く。氏の
今度名譽教授とも、隠退せんと此氏が此職
ハ非常な長い間が、今も尚ほ豊饒として居る。
氏の英法に堪能があることハ氏の撰に係る辞典
と共に世おのつから月旦あり、敢て吾等の嘆きを
要しうか、其の教を多くし人の話も據ると、氏
不と学生もよく解く。人ハ其の如く難解

の辞句の易々と極めて清潔にして人の肺腑に入
るやうな教へる。の如いのも痛快を感ずるとまじ
激賞してゐる。流石の流石の英子の如く、此の如く
此日かぬ。

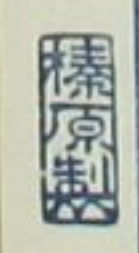
教授中、忘れ難い人ハ坪井正太郎氏が、此の時
人類学のオリーリテーで、大に此学科を教へる傍
ら早稲田の味で、同じ洋屋を受持んだ。其の蒲柳の
葉も、~~味~~味、炊く真面目の人であつたか、時に談
話を弄して人を笑はせし。如何なる勤勉が教へるに懸
切じ、其の後を以て理解せしめ、此の如く。自今も
とい、此君と交つて人類学に興味を感じ、其の如く

此の理解のあるるは、君のお蔭に依るのひある。當つて
この市大の君が熱心に蒐集された標本を元とこと
もあつた。君は一つ一つと訂正して説的とした。君の説的
も一種の趣味があつて長く記憶を存する。自分の中
に維持して一時の量を集めた。こゝにありて神代
土器やその他の品、掘出を一再する千入の品が
往々其の用途に解し、魚骨の品もある。必ずしも掘
へて君の説を治め、~~君~~いつて釋然することを得た。君
は此の品々を考へて、考へた。君は洋行後一層
智見を開拓した。考へた。君の浦柳の次は長
い天寿を、~~保~~保つた。

徳義淳重、徳士と嘗つて早稲田に教へんとのことがある。自
分の徳士に就ての思ひ出が一二ある。徳士の常大は
課外の種々法律の関する講演をせられたが、先ハ

吾々の法律科の門外漢も興味を興つてゐる。その目
合ひ今も其の筆記を有してゐるが、其中は監獄の関
する可なり纏つた講演がある。多分監獄学を教へ
た人の徳士が始めであらう。自分も筆記を、監獄
の身とて、獄中、獄外、公然許さぬ、監獄論
教冊と書いた。この徳士の課外道義、その所が
ある。此石渡敏一氏と嘗つて刑餘の人を保護
する為めを論じて、行法に時外四の实例を
委しく聴かされた。徳士はあつた。徳士の善悪の
法ある者が閉却するが、其実大切味のあら日本
の習慣例への隠に右養子等の問題を提へて故
味の研究する人があつた。晩年志きりゝと

式目の各年代の改本を多く蒐集せんことや五人
組制度を深く研究せんこと等も、協士の趣味
の一端を語るものがある。協士の改谷芳郎協士と共
し、高津子と親族関係がある。前年、改谷協士
の先人改谷附座日おの記念会があらわれ、時の
流況の如き、日協士の談見を見るべきことゝも、
言を得たものがある。改谷附座日おの碑文は、
三島中、海におもえ、撰つて書かんたが、附座の一代の
事と叙し、終つて最後は、田舎いかる年、官に終つ
たとある。日協士の満造は、出来をぬた。流況の大要
ハ之れを駁すこととある。協士日ハ云く人の軽重
ハ其人の学問人格とある。日協士の官の官、年ハ人を



軽重するとの言無の、大隈侯の維新の元勳で屢
々其の間、之れハ國家の功勞も多きが、死百年
の後、又侯の事蹟として傳へるもの、希即位の大
典を奉げたとするものがある。他ハ或ハ傳へらる
いであらうと云ふ。如何にも因感がある。大隈侯
薨去の時、早稲田の漢語の者が、其遺を考へ、其
ハ大切なる事と云ふを、海へ其の自命ハ、其のつぎ注
言して補正した。其の古くも有るもの、即即位の
大典を奉げたとするもの、関白も其の事も能はらう
つ、布衣として大典を奉げたとするもの、始と
補正して、協士の説と其撰を一として、侯一代
の経歴中、之れも大なるもの、無の、官の官、年ハ

云々する如き、官僚臭氣の儒者の為す事、偶々報章ある心事の、極方をも告白するや、よき比、博士の言ふ所の、迹石に、識見が、

三崎堂、時氏、氏著の幕末時代の回覧、その、
事業後の多を行徑を異し、初期の早稲田の
法科を、君の軌痕を仰ぐ。君の、
身が、回覧の頃、勤勉の人、
人をも思ひ、その、友人が、
欲る世渡りの上手の人、
出ても、君に、今、
新著の主筆をして、

叙すこと、
り、四、
阿、
堂、
也、
金、
二、
の、
二、
評、
の、
味、

の出来が日受しいよりあるに。君が多く仁徳の徳を
を免ぬや。得にことし。就とい。消息通の君の
舊の御主京極氏の所為品を譲り受けけに。比
と云ふに。載り多かそ。い。あ。君の別在に。鐘
合。君をたつて。自分が病後。日に。鐘。合。君の病を
君の病を治ふに。こと。も。あ。つ。に。か。君。の。家。に。別。在
に。致。し。に。

法科の
早稲田の初期に九年間。直つて。淳々。漢。ま。が。教。へ。ん
に。人。に。本。多。康。直。と。い。ふ。人。が。在。つ。に。獨。逸。の。法。律。博。士
に。大。審。院。に。判。事。と。も。あ。る。位。に。早。稲。田。に。来。り。専。ら
民。事。法。法。を。教。授。せ。し。に。風。貌。の。温。雅。の。人。が。あ。つ

に。が。華。族。の。出。と。記。載。し。て。あ。る。け。ん。と。も。確。か。か。ら。ぬ。
自分と交りかあつたが深く。さ。う。な。ら。ぬ。か。記。さ。し。き。英
事。と。持。た。ぬ。唯。此。一。事。思。ひ。出。す。の。に。君。が。深。く。金
魚。に。趣。味。を。有。り。庭。園。に。特。に。池。を。造。り。て
多く。を。養。ひ。暇。さ。く。ま。ぬ。べ。し。と。玩。弄。し。て
餘。念。が。興。つ。に。勿。論。行。々。珍。々。し。い。此。魚。の。行。も
あ。つ。に。と。い。ふ。君。の。ゆ。に。三。十。三。年。一。月。亦。九。の。四。十
三。山。風。に。致。し。に。

早稲田の生んだ。考。に。内。田。銀。花。氏。の。あ。る。こ。と。を
忘。れ。て。い。ら。ぬ。女。氏。の。次。二。十。二。年。東。京。大。学。に。入。る
後。を。卒。業。し。て。後。帝。國。大。学。に。入。り。文。科。を。卒

業しとから大宮院に入つて修業をつづけ、文科大宮
に教鞭を取らる傍ら、早稲田日へも来て教へ
た。君の治法三十一年、文部省らも改海防
を命ぜりしれが、君は先づ三十五年十
月大宮の院に於て定期の試験を経て文学
博士の学位を得た。君の専攻は回史にあ
つたので、政史科の試験を多めたことと言
ふまでもない。君の海外留學中、英國のオッ
スフォード大宮に學ぶ人だ際、回大宮の治法
の所見を學校に報じることがある、その治法
三十七年三月、君が早稲田の報に掲げ
てある。君の帰朝後、京都大宮の教授とらつた



終つたが、さういふ馬宮の人であつた。君の体軀は矮少
で其の風貌は、いつの逢つても、年々の如くも
あつたが、學問の其の体軀の貧弱ささうな
比例であつた。京都に於て、毎に君を大宮に訪
ふたが、君は母校を思ふことの切なる人が、早稲田
から人が尋ねて来たときも、自宅から懇々と大
宮の、出頭して面接する人であつた。いつかや君が
君の古文書の数々を大宮に陳列して、長観に
供し、自時、自らの意見を述べ、見に行くと、君は既
に自宅に帰つて、場を、君は、事終るが
私の名刺を見て、直ぐに博士の報に、これと云ふ、今
内田さんが、君の、ユツクリ、君と云ふ、内田

紀元
こと
とら

もよく、君が去校して深切に日列ぶを説めさる
此考しこと早く折い此

南條文雄博士も著書別項に録し村上香村前
田慧空二博士とせし本邦寺派の著述ある如
自今終に南條博士に面接の機会をも得無か
つに係し近年出版されし博士の傳を讀んば凡
そ其人を知ることを得也。私が博士の傳を自叙
し先づ珍奇を感ずるの、幕末に日美流政
争ひに原動力が満の爲め、僧兵を訓練して
有事の時を備へんとし、際し博士もその僧兵
の一人にあつたことよふことが私をして驚異と思は

源氏物語

あ、あの漫筆か人がとあるのよ感せしめたる。博士と
外四の笛をさしてサンスリトを確證し、外四通
てあり、そのまづ口説き、ト姿で本山と勤王法
主の要職旅に、~~君~~しに人がある。君のまづの
傳教印を批するを、よくおのづから月日があ
るから、暇をを要し、さういふか、私が博士の傳を後
人び、最も感ずるに、君の漢詩は、天才かあつた
ことである。君の好む詩を、心ゆく、あつた、
詩がある。さうして、其の詩は、浮屠氏の臭氣のあ
るものか、さういふ、流派本位の詩で、いんを後人の
感吟せしめる。博士の傳は、毎、紙詩を以つて
満てみる。博士は、詩人として、~~木~~大家

東京專門學校第十五回卒業式に於て

板垣退助

今日は本校第十五回の卒業式であります。私も御
招きに預りまして此螢雪の苦學を終へられて前途
多望の青年諸君に親しく接するを得たるは深く
私の光榮と致す所でございます。抑も諸君の今日あるは
平生拮据勉勵せられた結果であります。又大隈伯
翁の薰陶の厚き教員諸君の親切なる等に依つて本校
の令名は國の内外に聞こへるといふことは私の誠に敬服
を致す所でございます。諸君は多年政治法律の深奥
なる學理を研究して今日其業を終へたるもなほ
諸君の學術技藝は他日國家有要の器とならるゝこ
とは私の信じて疑はざる所であります。さて諸君は今

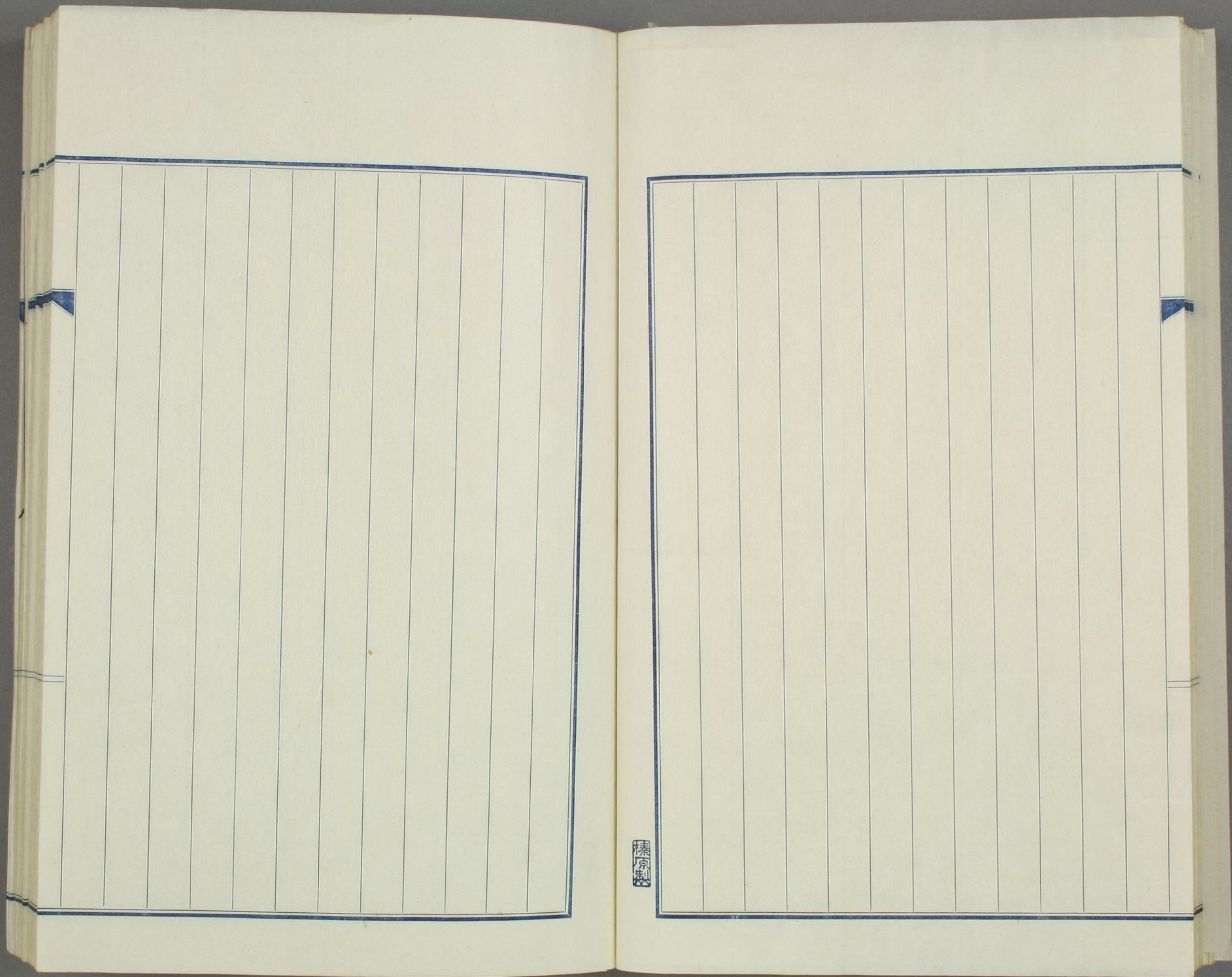


之を例すれば進水式を了り是より大海に乗り出たさん
とする所の大船である。是より此船の方向針は如何なる點
に向つて運轉を致すか。此船は船體頗る堅牢に致し
て又帆教馬力等も重大なものであります。然るに是より
如何なる暗夜にも如何なる波濤の中にも航して其進路を
誤まらぬといふことは頼むべき、彼の羅針盤があつてな
し得べきものであらうと思ふのであります。其羅針盤
は何であらうか。私の考ふる所では正義正直なる道德心で
あらうと思ふのでございます。是より萬般の慾情を断
し劇烈なる社會の競争に於て一大勢力を得るといふには
即ち此正義正直なる道德心にあつたと思ふのであります。
此道德心は即ち諸君の是より進路の羅針盤とせらるゝ
ものであらうと思ふのでございます。さうして今日上下

社會の道德は頓然として衰へ、古來我國特絶の美風たる
 士風は全く地に墜ち、社會一般は徒らに利慾に奔走して
 廉恥の何たるを顧みない、今日に置きまして此羅針盤
 を以て社會に立たしむらば諸君は必ず最後の勝利を
 得るに相違ないと思ふ、然かし此人間の事は知ることの
 難きより行ふの難きものである、又た行ふことよりも行ふ
 て遂ぐることは一層難いものである、又た行ふことよりも行ふ
 則ち行ふに遂ぐるには萬難を拂して進むの勇氣と百折
 不撓の忍耐とを要するものであるから徒らに學問許り
 長けて居ても薄志弱行の徒には決してお來りよりでな
 いと思ふ、そこで此正義正直なることは此勇氣を發達せし
 むるものであらうと思ふのでございませう、又此正義正直な
 るものは忍耐力を涵養するものであらうと思ふのでござい

No.

ます、又此正義正直なるものは世人の敬服賞讃を受くる
 ものであらうと思ふのでございませう、左れば此正義正直を以
 て世に立つ時はぬめは迂闊の様で今の才子とか策士と
 かいふ人々より見れば誠々固陋の考の様に見ゆすかしか
 れず世が最後の勝利は必ず此の正義正直の人には歸す
 るので御座います、今日日進の學問を修められた諸君の
 前に斯様な單純の語を呈するは誠に能き足らぬ様で
 ありますけれども、此老骨に於きましては兎角頑固なる考
 へであります、現時の世態に徴して聊か憂慮に堪へん
 所があります、此一言をなす、聊か御招待を受け
 ました責を塞ぎ、又卒業生諸君に此一片の婆心を一言致
 します、こと此の如くございませう。



泰原製

序の校垣伯に就ての思ひ出を語るに、私に改進黨あり藉
を以ていふは、堂流の事む伯に交渉難く、ことか出
来て、私に使ふも、是に當つた。事ハ概ハ校垣内
閣より可なり前もあつたと思ふ。其に伯の芝の公園
内に住してゐた。亦ハ難地と云ふのを尋ねて
つてもさうと思へば、家が見當らざるに、自分
の吐び、自由堂の総理とも云ひ、程の人の住
む家の門構ひもあつた。伯ハ平民的だと云
ふことも家の相違ひもあつたと考へた。どうもさ
う家が一新もさういふ伯の家は所在不明
として訥べて来た某者難の家と就て、此近
又校垣入りの住宅かあるかと、下駄扱きの所

少くとも、校垣のこゝれと聲がして、直ぐも隣子が開い
 たり、ト見ると、そこは坐して居る比の、かゆのち
 るの伯の、二三の字を打ち、ふか漢語中、七ある
 自今、故の事、教の、い比刺を、（一）伯の
 挨拶を、ちと、伯の、一見、日、如、き、澹泊の態度、を、高
 こし、と、案件、も、互、ち、伯の、一端、を得、れ。此、時、分、ハ
 伯の、窮、困、時、代、が、あ、つ、た、と、し、て、其、の、任、務、の、終、り
 見、す、不、く、し、い、の、を、案、が、と、し、共、一、一、軍、の、首
 領、の、左、核、振、う、の、お、ろ、も、平、民、的、の、さ、さ、感、服
 し、改、進、堂、事、務、所、に、立、戻、つ、て、伯の、態、度、を
 報告、し、大、衆、を、平、く、人、の、體、面、を、態、度、い、ち
 へ、る、凡、び、無、い、さ、さ、め、と、自、分、の、學、問、の、修、養、と、釣、り
 ます

標

懸隔の甚しいことと思ひ到り、寧ろ校垣伯と
 川村と字のせ、大隈氏の元年の態度へ
 決して伯の態度を、（一）

（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（百）

業、公、逸、し、七、教、職、を、以、お、の、人、と、及、ん、だ、ま、い、自、分、の
 思、ひ、を、七、教、職、を、さ、さ、し、故、人、の、限、り、の、か、さ、の、か、ら、
 今、一、つ、早、稲、田、の、演、壇、に、ま、つ、て、外、西、人、を、就、て、語
 々、と、さ、え、ハ、人、類、を、さ、さ、し、七、亦、進、化、論、者、と、し、て
 誰、の、も、知、ら、ず、モ、一、ル、ス、教、授、の、早、稲、田、の、開、校、式
 臨、ん、だ、進、化、論、の、一、端、を、講、演、せ、し、て、（一）
 今、開、校、の、決、定、日、に、あ、つ、た、を、式、臨、場、と、し、て、（二）
 伯、モ、一、ル、ス、教、授、の、通、譯、と、し、て、石、川、千、代、松、塔、士

が、近頃某雑誌に自家の狂態を語らば中々此
時のことか出てゐるので記憶を呼び起しむるは
。要するに帝大時代は此の教授も親しく動
物学の教を授けられた教授の快楽の風半も
。憲法の年舌も宛りて今尚ほ目撃するに
き思ふを為す、殊に教授が五色の目今ヨク
をある手持つて、黒杖に禽を握り、その給を
書かす、これ巧め、且つ達者であつた、ことを忘
れんとして、忘れ難いものがある。進心論の当時
日本より、新らしく、教授の教、方々趣味も
あつた、開校を祝して、数式論、教授の海
濱を請ふ、此の如く、若くは例のこと、と、星



校、後を書き、聴衆をアツト叫び、此であらうと
想像する。石川博士の改訂の、大隈、
開校前既、モールス教授、思つて居ると
云ふこと、其時、差も内地産の多くの陶器
を示して、教授の批評を求め、其時、石
川博士が、譯し、教授の品評や、庶務振
か、如何にも巧め、あるの、差も、油子、釣
り、て、品評を、治す、為め、出、一切の品を、教授
に、贈、え、ん、と、さ、ふ、こ、と、か、あ、る、開、校、の、際、に、講、演
を、請、は、ん、た、り、も、斯、う、縁、故、か、ら、生、じ、ら、れ、る、あ、ら、う、
大隈、侯、の、モ、ー、ル、ス、教、授、当、日、の、講、演、を、受、け、
ん、か、ら、い、う、か、知、ら、る、い、か、ど、か、終、つ、て、か、ら、差、は、不

川崎士にエールス教授を評してその人の外交官
たる人に其の甘い油子なる何人かやらし
前日肉系をやつて仕舞つたのも其の油子に
乗せられたりかと笑はれしと川崎士の後び
あるかあるも君の評の如く外交官たるも
通判して取らぬ才のさへ人地あるべし

谷口藍田氏を早稲田に迎へたのは其の年次であつたか記
懐に懐懐としてあるが明治三十五年十一月の早稲田
の報日であつたか肥後豊一を推り八十一歳に折
ぬはれしことか載せしあり美と此の年々教く未だ
北とあり其の及した月東京をいつた代も早

藤原

下野あ
の人は未
だ

福田大吾と改称し大子江漢と改めし時があるから
おの教養を人々の東京をつま枝時代であること
ハエハリともい確か自今か幹事時代はあつたか
おを訪問して未校と傳ふたよる自今かある其
時私を招きしれ人々の門人が室内者へ奉仕
してこれ思地職人かあつたおに初對面の
時を遠懐するよるおの改稱も觀てあつた相違
なきかおの雙葉として狀貌魁偉人地あり
此の油極めて快活に早稲田の学校より去る人を行
くと云ふん此の油の竹の儒者が大隈彦平の因縁
があるからして其の際の大隈彦平の八太郎時代の思
ひ出をいろいろ語り出てん此の先彦平の二十五年

如何なるか録さるに幕府維新からの日の志を漢文
見よと先達の動静に關する記事が侯の八十五
年史を編する時、可なりゆゑの回憶の後述つれ。為
り美の後の令詞豊五郎日氏が教へて来ると言
ふ小田原在職の可なり時期、流つれやうと思ふ
私を翁の思ひ休しに思ひ代りた故人とするて先頃其
家から花書か出たが、私の手紙を返すにのこ監田の
か花の時高嶽を登彼しに時の長篇の漢文紀行
と、登急を先父に報じし長文の書問とをある
書問の前の頁を記すあるか、紀念とと保存し
てある。



て

日本文藝と云ふ人、有名な統計学者が長く早
稲田を教く人だが、今、鬼ゆすると支那人であるか
に思はうと、若い人達に知えらるゝいけんも、此の
学問の先輩と云ふ亦日本の統計学者の先驅
と云ふ忘れたる人がある。杉亨二と云ふ統計家
もあつて呉氏も、年の上、先輩であつたが、学問
に呉氏より著しを輸つれであらう。統計の考へ
が、大切な事であるが、教会的に面倒な事
であるから、鬼南日本の学生に嫌ひん、之れを教
へる人、骨が折れれ。實に、換ふて学問に、を専門
として之の事者、今日と云ふ甚し少く、實に
此から見ると、呉氏に對して、尊敬を拂はらるゝ

矣代、もろくの論定が、数字又の、局使しとの
 人、其の比、動七士んが、サウラソ、ジをやり勝の、この生
 と柳へ、長く講座を保つ、の、元、演説が、乾燥に
 災也か、身巧、四、数字、を、操、つ、と、ま、ま、生、に、倦、息、を
 生、せ、し、め、ろ、う、と、ら、じ、復、倍、の、種、の、あ、ら、う、偶、々、看
 か、の、業、心、に、係、る、統、計、学、の、必、要、と、題、す、る、一、編
 を、得、た、ら、う、ま、を、引、録、し、て、君、の、説、き、方、の、一、斑
 を、挙、げ、て、見、よ、う、ら。

世の學生、何故我、の統計、の如く、斯く、あ致
 味、し、て、境、域、廣、大、に、世、事、の、論、難、陳、辨
 討論、に、有、益、と、し、て、定、力、あ、る、此、学、の、講、究
 を、等、期、に、附、す、と、や、又、之、の、氣、の、お、の、流、る、



統計、の、土、地、気、候、の、利、害、農、林、漁、業、工、商
 を、始、め、政、況、宗、教、道、徳、財、政、何、から、何、ま、む
 凡、そ、人、間、社、会、の、目、的、に、對、し、て、現、象、と、し、て
 考、へ、て、數、を、集、め、て、計、ら、う、と、し、る、と、又、討、究
 の、方、法、を、考、へ、て、此、方、法、を、器、材、と、し、て
 論、議、の、陣、頭、に、現、れ、ん、が、如、何、ろ、う、と、問、題、と、し、て
 口、を、入、ら、ん、と、し、る、と、容、の、を、而、し、て、數、を、考、へ、る
 の、實、を、論、議、に、拵、け、る、統、計、の、効、用、を、立、論、
 と、拵、け、る、器、材、と、考、へ、る、又、魚、形、の、雷、の、如、く、
 向、あ、所、投、靡、せ、る、と、考、へ、る、射、の、所、破、推、せ、ら、る、
 の、如、し、統、計、何、ん、と、考、へ、る、此、の、利、害、を、用、の、の、
 と、考、へ、ら、う、や、荒、し、美、論、議、と、し、て、此、利、害、

を権一以て法予、臨ま、法予、文殊の智、富妻
那の并あつと、其、其有を無と、其無を有とす
ること能はざるべし、理語に云いずや論じること証
據と、而して天竺の社会的経済的政教的宗
教的證據、他、之を論証することあり、一七世紀
二七世紀するまであり、或、則ち今日以後
天下論争の詞、之を最終の勝利を収む
ことあり、多數の確実なる證據を有する者の
手、最後へ、火を起す如きも、あり、或、
と、いふも、君の口吻を言して、おろ、恐らく、教育家の
論議も、此油子、あり、或、君の或年の日の講義
を、父と、早稲田の、或、或、何人か、最も統計の、
と、いふ、

深田

此、私、未だ、調査の、是、か、ま、い、が、敢て、君の、講説を、聴ふ
引、これ、統計、之、趣味を、有ち、何人の、議、論、予、統計
を、経緯、と、し、巧み、又、数字を、得り、出、し、論陣、の、
利益、と、し、た、よ、か、一、人、あり、た、ま、い、誰、の、あ、り、と、う、大、隈
侯、の、あ、つ、た、い、か、君、の、数字の、記憶が、よい、のみ、と、い、ふ、
君、を、ま、を、得、り、出、す、の、巧み、又、ア、ートと、有、する、か、の、如、く
聴、者、と、し、た、ま、も、君、の、倦、ま、し、め、さ、る、の、長、所、が、あ、つ、た、い、
日、内、教育の、揚、向、山、梨、社、に、去、路、し、て、の、海、濱、の、
徹、尾、軍、事的の、統計、談、が、あ、つ、た、い、か、平、筆、の、
中、に、其、の、舌、を、捲、いた、い、
人、の、倦、怠、を、感、せ、し、
又、た、ま、い、

教職員以外で、学校に寄與し、人が少く、あるや

に、私に先づゴルトン夫人を思ひ出さ、夫人は英國の人の
富饒の産を播し、良人を生つてから東洋に渡り、
心かけ目支那を経て日本に久しく滞在し、佛敎の
研究に心を砕き、ロータスゴスペルの二冊の著がある。
研鑽の志、佛敎の經典等を蒐集し、
佛敎の經典の碑を模刻して、野山に建て、
山に彫刻を施し、碑を思ひ出さ、
設け成りし、世界大戦の時子息が戦死し、
夫人は女に帰回す、
人格の學敎して、
大いに寄附して去つた。大正の圖書敎の入口

深田

又、
二、あの一奴の石羊、夫人の遺品の一つ、夫人が朝
鮮から狩来し、
種々のもの、
佛像の画幅、
内外の人の展覧、
校舎がある。

早稲田、
野武、
佐治、

そいつ人が、君は早稲田の門を出れば平頼壽伯の
高松藩の勘定奉行の家へ生れ、先代も
の少い之を、伯壽の信頼する所があつた。君は當つて
農商務省の^{小使}に使はれた。君の別直の^{小使}は
高川氏と合はず、去つて事業界に投じ、君は依つて
苦さへはよか少く、君は躬行實踐の人で馬車
鐵道も、市内へ起し、時を自から乗車して登
替^替へ。實業界の難件、^{多く}君は^輻運^せる。君の
割解と^時が少く、^{多く}かつた。保し君は實
業界の^民権家が、権柄も、^所致^して事を為すこ
とと並流とい^議と異なり、君が衆議院に議
を有し、^自今も^席末^のみ^か、^志ばく君の

藤原

七し
六し

長濱殿を聴く。いのか實業家代表の態度が
思ひ存分、^吐き、^{政府}の心腹を^実か^くの
^吐く^事も^今の^政府^の心^腹を^実か^くの
格者い無い。實業界の左も、^切然^か無くも
授意の^末、^其ある^事の^珍しくも、^君
^君の^心腹^を、^其の^心腹^を、^君
然し、^此所^で、^日本^の権^の獨^をも^危き^事も^支へ^た見
島^推直^の採^取も^何ん^の沙^汰も^無つ^たことと
あとい、^君の^心腹^を、^其の^心腹^を、^君
七し
六し
君は色里と、^君の^心腹^を、^其の^心腹^を、^君

體格のよい人があつたが、どうもこの通人が、淫曲な趣味
があり、酒と嗜み、賭博を積んで、欧米の實業視
察を兼ねた。……

早稲田の恩人として忘る可からざる人は竹内明大ら氏
がある。早稲田に理工大を創くる方々、何人よりも
大なる富の財源を以て人の世のためがあつた。此の学部
の経営も、勿論少からざる資金を要した。多くの
の資金を定めて、馬志家もあつたが、金よ
りも大切であつた。州校の諸科を受持の教
授であつた。教授の金に仕入の得べきことを、而
して君は、この教授数人と定めて、……

仰り理工科の第一、國難を見ず、漸かんと。竹内氏の
ことを見ても、自から工業者の校を興すの志があつて、
先づ適當の品のある者を探板して、海外に留学せ
しめ、その修業を待ち、其校を創立てんとす。一
此際、早稲田の理工科の設置の案ありを聴き、
其の案すくなく、^{基礎}自合が、一校を創くる。既
に、^{基礎}早稲田大女子、^{実業}實業として其の計
畫を助くる。荒かすとして、折向の志を
して、留學者の人の帰朝の上の時、早稲田の理工科
に投せしめ、……^{出さ}出さした。此の留學者の為り、
君の投せしめ、……^期期の未
に満たぬ留學者の人より、自から出資と続けける。

此、その人々の階級開校を疎く可からざる教授は、
早稲田が此の学科を置くる先ず、自から為さぬ
事あり、この事も林内氏が代つてせんじやらざるもので、仕
上つた人物を或人が開校せしむるを得たりの、何寄
りの仕合があつた。丁度早稲田東京大学に校を
移すつゝ、時、小野君が早稲田氏始め十数人の
帝大出身の若者を揃けて大隈侯に紹介し、
のと同敷の事とあつた。會費を得ることも難い、
申し、いかん人物を得よう、ことに一層難い。ち、南の教
授を得よう、と学科を新設する事、無謀では
な、学科の真意、教授の如何なること、言ふ
まじらざる。林内君、土休の人の君の、君の、校

深田

佐伯の、天と云ふん、林内、細氏、ある。明大、小氏
の改定、その、早稲田、実業本位の人が、鑛山の採掘
を、と云ふん、君が、校を、起さん、と云ふ、其の
事業に、資せん、と云ふ、君、と云ふ、
超越、し、所のある人があつた。折角の志を、抛し
早稲田に、貢献、し、と云ふ、(實業家と、
異、と云ふ)

知、その、佐伯、も、曾、つ、と、早稲田、の、法科、を、教、つ、に、
と、の、あ、る、人、だ、左、と、つ、と、早稲田、と、つ、と、因、後、の、深、い、人、に、
あ、る。君、の、危、法、の、生、人、に、り、代、の、名、人、の、一、に、あ、る、矢、
代、の、印、氏、が、法、科、大、の、と、つ、と、ほ、の、道、道、森、路、外、の、

首班之列すまじき、君の人格に立ちあがり、一旦責任を感
 ずると聞かすを幸せ、深き識をもち、このこと、
 鮮かき態度に流るゝ英國流の政治家と後者
 の間に、君が死期に臨むと、
 心に見らるゝも君の素行の然りたる所は、
 政治家の及ぶ所のみ。君は大隈等といはれ、
 の関係を保つたが、政治上の事、
 に従はまうたやうである。君の死期の近づくや、
 毎日氣遣つて侯の邸に参入し、
 君に就てグラウドストーンの段後、
 ウェストミンスター、アムステルダム、
 衆庶の冬に行はしめ、目撃する所を、
(東京)

の面、
 君の態度を得、
 め、
 氏と自分との後へ、
 二、
 山、
 たことらむと思ひ起す、
 ……

早稲田に拍發的の字附をきん多く、恩人の録を
校廣の名に添ふある。中々就て風變りの字の異をせ
んと恩人の田中光顯伯である。伯は主として吾が國
書に耀かすものを多く寄附せられた。荒く伯の
字附が無ん、國考館が別底有ち得るものよ
かいくのもある。六朝字本皇侃の禮記の義疏
一巻の如きは、本本のわらあるが、本回の支那より早く
佚し此のわら、此の一卷は皇侃の弟鄭灼の自
筆である上に、書つては光の皇后の御持本也

皇侃

あつたことが、卷末に捺してある内家私印の印
は由つてわら、いん七と法隆寺の印がある
のが紛れをせし出たものである。無論國寶なるべき
ものがある。田中伯が最初、早稲田の寄附せられた
の、此の書、重の書は、其後、古くは、たより、人
六朝の、欽野王の玉篇と我回上代の古文書
といふ。目此の六朝玉篇も支那より送つたもので
日本に、断簡を、或る、傳つて、つて、貴を
の、もの、と、ら、つ、て、お、る。田中伯が寄附せられた、山
寺、舊、花、の、大、字、本、に、校、教、の、最、も、皇、室、に、よ、り、か
り、ま、る、中、に、あ、る。無、命、國、寶、の、價、値、が、あ、る。
上代の古文書、伯が、執心、に、日、本、集、を、え、た、よ、り

〇天平に大回改を以て各時代の渉つて標本と
して、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 極く貴重なるものあり。尤も、
が、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 此等皆、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 圖書院
を飾るものにして、普通圖書院の購入に往きの不足を
感ずる如き多量の私入大蔵の列産購はんとい
て精々難いものあり。伯の字の貯り有り友の
の圖書院に誘り得ることゝが、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 伯の尚書院
年惟、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 新天地を、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 勤王志士
の遺墨と多く、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 三洲の
註文、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 維新の元勳、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 伯の
て建設せん。早大の圖書院は、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 志士、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~

東京

●因縁。少くも斯の遺墨を保存するに
ハ、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 伯の字の貯りせん。所以、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~
く、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 伯の字の貯りせん。所以、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~
献し、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 伯の字の貯りせん。所以、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~
く、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 伯の字の貯りせん。所以、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~
。この内府の遺墨、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 伯の字の貯りせん。所以、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~
書言并に刊行の年月等も仔細に録し、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~
古書史の好史料あり。圖書院に缺く可
らざるものあり。伯が校書中持し圖書院の志
まん、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 伯の字の貯りせん。所以、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~
味とあらざるため、圖書院に自今、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~ 伯の字の貯りせん。所以、~~なほ~~ ~~なほ~~ ~~なほ~~

有り難く思ふ。

三倉先生(天心)氏も早稲田の初期より文科の課外
講義の度々来られたりある。いつ天平式の服装
で来られたり、此の服装が氏自分の工夫で出たよ
りである。君の講義は日本美術に關するよきよき
りして王子ロサ氏の日本美術研究に説き及んば
と講演を聴くとき時の学生は一人の活劇と
ある。三倉先生は帝大の君等も一年の先輩と
あり、君等と共に王子ロサ氏の教を受けられ
た。君等も君等も王子ロサ氏も最も多く美術
上の教を受け、遂に美術の技指導者となつた。

東京

開拓者としての君を誇るべきであらう。王子ロサ氏の
日本美術研究は帝大に於ては経済社と君等
と教授する。餘業であるが、此の餘業が日本
業として本に貢献した。本業は王子氏
が日本の新古の美術に君を注いで鑑賞し批判
し其年代を推定する事を中心として日本美術の
古い。原野も此の病を養ふてある。古風な
日本美術家が治習的に美術を鑑賞する事
はあつたが、美術的研究に批判しては王子氏
り始まつた。君も残念な事である。奈
良の多くの佛像は王子氏の審定を経て其の
像の年代や巧拙を定めた。王子氏の此の

のオーソリティーは進々高に上りて来り、
 ろうな。フエ氏の若き美術界に於ける
 功績は、**眞に偉大**なるものがある。氏の著作を
 一読すれば、**止まらざる**の如く、**九十日美術の天**
 分があるのを、フエ氏の繼承者として、**後進**とし
 ても、君を推さざるを得ない。美術学校を創設し、
 のち多くの芸術家を抽いて紳会に比し、**亦君があ**
 つて、久しく、**謝罪**に在つた日本美術界に、**初め**
 て黎明を得たのである。君の自伝を刊行し、**画を**
心する人に無つたが、**芸術の士**を率へるの能くあつ
 た。況んや初期の**芸術家**に、**援助**を爲さるゝ所があ
 る。君の文人としての**落人**と交り、**相和郎**を訪ねて

藤原

茶の代り酒を出してもある人があつた。酒樽を
 出して、**合ふ**のことがあると、**必らず**長閑の狂詩を高
 ちて談笑して代へる人が、**狂詩の達人**を得てあつ
 た。君の外四人の**為り**、**書**の「茶」の一書の如き、**君**
君の**心**の**出来ぬ**君心である。

教頭と

前稻春義氏、天守考之氏の細居の兄び、其後の創
立次から、学校に投して教へた。君の漢字の素養
が、あつた。文章に長じ、及、譯を、力上手であつた。後
に、豊後改の高松の高等学校の校長として赴任し
可多長く在職したが、晩年に早稲田に復歸して卒
つた。私が、平頼壽伯に随つて高松、湘ん、時、君の内
業の校に在職中、その学校の募金に就き、君の
幹、旋を、又けた。君は、高川縣の校友の頭領株
の校友、余の書力、の世流を、した。早稲田の校
の校長、天守氏の早稲田を去つた。君の、其の親
戚の故を、以て、氏と去就を、共にする、ことを
し、ころ、つた。

標原製

能終

梅若誠大、氏、美人と一生を、捧けて、長、い、間、早稲
田の教授であつた。君の、能、母、果、の家元の出である
が、家業を、事とせず、帝大を出てから、相、高、の、官、職
に就いた。ところが、君の、温、厚、の、資、の、官、吏、と、し、て
も、古、教育、家、と、し、し、早稲田に投してから、賜、目、も
振らす、育、英、と、盡、した。君の、如、く、高、年、に、あ、る、ま、る、の、
氣、の、何、ん、の、妻、故、も、さ、く、早稲田に、終、始、し、た、例、の、
他、に、無、い、か、ら、あ、る。君の、昔、徒、を、教、へ、る、に、深、切、巧、
く、あ、る。君の、月、半、の、温、藉、の、あ、つ、た、が、事、に、
人、び、別、他、不、慮、の、愛、が、あ、つ、て、校、紛、の、時、も、君、の、特
徴、が、現、い、ん、の、衆、の、畏、敬、を、傳、へ、た。

今日観んんてみる早稲田の初期の海河も竹井
耕一郎酒井雅三即氏をいふがあつた。竹井氏
倚玉の富貴家の子で、帝大を出て、其の専攻の憲法
を早稲田に教へたが、不幸肺患に罹り、年若く
して歿せられた。君が領事官の海河局の庶務長の中
自分が見舞つたことがあるが、看護士つゝ、ある
に若い夫人を従へてゐる、その人が自分の専攻の師
星野恒雄博士の令嬢である、ことを始めて知つたこと
を今思ひ起す。酒井雅三即氏、佛國の學問に
人心東洋史を委しく二三著述もある。氣板を
面白くする將來を期せられたが、港尾大震災の
際上から墜して死した。



竹井氏、倚玉お徳谷の富貴家の目出であ
つた。耕一氏の父の遺孀といふので、維新の際ハ勤王
家の志士と知れん。大久保公をいふ、親交のある
人であつた。

梅若補、梅若氏、其の考も一年後の帝大生が、
帝大時代の秀才として出て、後、憲法論者
として名を揚げた。梅若氏の東大目と首席
とを争ひ、梅若氏に打勝つて、卒業生一人である。

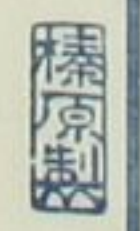
卒業後時の内務次官白根が一氏に知ると
神大外川好の書記官に挙げられた。此時縣
官にふくむもさき四條事件の頻出する所であ
るから、君が書記官に挙げられたのは破格の抜
擢であつたが、君は官吏としてふるまふ人か無
しの後、若くは官給のあつたに転じて、後、さ
もこの院の理事好の中、校長とつたが、縣
令激しくさし、教員獲得の運動を
どとやらあつた。その時、君を立、月、偉く思
ふ。終、早稲田に投ずるゝあつた。ふあ
る。

早稲田

早稲田

井上寮は、早稲田の初期、長く教鞭を執つた。大
な教授であつたが、京都大が創設するも、早稲田から
多く移つた人が少くもあつた。中、後、島田松若
大、氏も、この院に、井上氏も、其の一人であ
つた。君は、先づ、この院の、学務も、審み、その、生、も
受、から、この院、法律家、の、稀、な、味、家、の、あ
つた。書、書、や、骨、書、の、鑑、賞、力、の、大、か、あ
つた。京都大の教授から、抽、れた、京、都、の、市、長、
の、り、も、君、の、同、院、の、俗、才、が、あ、つ、た、こ、こ、か、知、ん
る、自、分、も、さ、し、く、交、つ、た、が、あ、つ、た、も、多、方、な、故
味、家、の、面、白、ろ、い、人、を、け、の、よ、い、人、が、あ、つ、た。

早稲田の日の後の崩れに及り、事終るを執る為の未
人の秋元忠忠と云ふ人のあつた。當時幹事の外に補
監と云ふ職があつた。是の副幹事のやうなもので
あつた。秋元氏の即ち補監であつた。多分庶務
令計共に此人が一年をやつた。其頃の事務
ハ、**林**中尾幹事令計の係長を置くと程々、**森**旋が
多かつたと思ふ。此人の経歴はよく知らぬが、**山**
田玄克氏が永富通八氏に由旋を頼むに延いて未だ
やうな記憶する。此人の人格のよきキハく、此人はあ
つた。人が善くも、学生に同情の有つた。此の
先年月謝の口取主は、後慢ひあると云ふ、若師が



あつた。...

高山林次郎(樗牛)氏も早稲田に来た。大田西祝
氏が早稲田を去つた後、美雪の講座が、此の
君は、君を受持つ為り、**山**田玄克氏、其頃君の
君の中、早稲田の教師であつた。君を迎へるに就
て、早稲田の文科、異論を云ふものもあつた。
當時帝大の出身者を迎へることを欲するもの
は、めまゝ、**山**田玄克氏の深つたおれ。標高の廣うい、
博士の意見を述べ、**山**田玄克氏、博士の談に
援つと、或る料理屋に招いて、款待した折に、**山**
田玄克氏、自分は何か、**山**田玄克氏の癖、**山**田玄克氏

くよめて下さいと云ふ比のむ、博士に短刀直入、君の工
工介ステウツク比と評した。是れと對し、サ、序
て高き山に別と解疏もし、さうつ比が、是れが、高き山に
氣あまうつ比と云ふ、跡終の時に俺んへエゴエス
テウツクと云ふのと云ふ比と交へしおる。君は太陽場又故
の太陽と迎へん。●論壇に、才を花を咲かす比のむ
大いれ名教が揚つ比。歴史畫論をも、太陽史上
と現れん比説比が、之れを、新して、道徳士に、其處
を、後、及、び、又、と、案、の、也、を、檢、掬、的、に、論、駁、し、比、の、
か、馬、骨、人、言、ひ、あ、る、君、は、名、教、が、揚、つ、と、其、比、
病、氣、の、七、進、人、と、鐘、八、名、の、傍、長、と、毀、し、比、の、場、し、
東、ま、ま、い、こ、と、む、あ、ら、う、れ。



勳記
君自身を、も、も、生、れ、文、章、の、如、く、又、煩
一、か、つ、比、外、と、評、し、し、の、よ、う、君、は、當、つ、と、山、田、一、印、
と、早、稲、の、子、を、精、と、投、擲、せ、し、と、伝、説、し、比、
の、比、を、さ、す、と、比、文、の、内、に、左、の、如、く、云、ひ、て、お、る、
樂、九、十、七、樂、外、史、書、の、
「内、ト、シ、

九十七宗先生是下、秋氣漸深、筆視清
通、高堪欣慰、通早稿曰、報編輯今
先生徵僕文一篇、期以十月之望、僕唯
唯奉命、儀如指息、懷、竊謂身列編輯、
宜努力以存命、乃退構思、連日、殆忘寢
食、而未始成一字也、願吾專門中、而校
課業繁劇、每迫作文、殆且八百篇、僕
責在添刪、日百餘篇、鉛槧倥偬、以夜
繼晷、里或至終宵不寐、心神恍惚、茫如
昏醉、拋筆者數矣、杜詩云、十日畫一水、
五日畫一石、能事不受人促迫、是語、
論畫文、亦何不然、甚、方今之文、不則功



拙唯、或為有構思、涉數日、人皆嗤曰、
厚鈍也、嗚呼、作文果如此、其粗率一
知矣、

森麟、大中(鴻外)氏、七早稿曰、初期より文科の
講師であつた、明治廿三年の學校名簿より君の友
が自叙めてある、私に未だ君の教を受けた當時の
学生、以て人に力何をも与へて見よ、か、自分自
身の君の清談を聞へたことか、一回ある、そのいかに
譯、た、た、講堂にいらして、教員を、聴、心、者

かゝり集す。君は其の長室の入口に立つて
一時以上の海濱をさんた。講堂の黄初論を
獨逸人の書いた小冊子を手にし、批評を加へ
から海濱さんたことを思ひ出す。此の海濱は生
者のめを多く教養多のありあつたにやうに思ふ。自
分の味を君の音容を梅しにのこんが初めで亦終
りにあつた。君は長幹の人であつたか較べ瘦方び歎
る物の憐れ人のやうに思ふ。坪内博士は森君の歿後
自追悼の文を心つて、君と大隈侯を比し、あま
共に征服さんたにまぬ所を一致かゝると云ふて
若くはかやうなるるけぬ氣の満ちた人であつ
たやうに思ふ。坪内博士は君と郷貫を同くして

泰京

壇の両端である。君が交際したる左も右も
のがあつた譯はさう。論壇の中心に君が一時頻
繁で、西龍と虎相搏つたの既かあつた。君は壯觀を
極めた。私の體験は一環を語つて、曾つて一
つ橋時代の曰宗想、親命を催し、時は私か幹
事か長室の狂詩を印刷して概々代へた。君
はさん、自次款をも教へ幹事の不行届を攻
撃さんた。君有体さんた。君は野蠻科の人である
から、あつた。君をこゝろに入つてゐる。つのも山端者
か自刺つた。君の前の目投郵し、此の君
は癡呆の癡いことを教へる。攻めさんた。此の
君。君は君も角君の次款の神速と速者び

あることと致るうい比。書信の時向を郵便のスタ
ニフが納べて又とと、君のあき内状と見えると其
と直ちの筆を把つて次致し直ちの投郵し
比の相違なきことかていつるか、
君の受け難い事此言に依つても見ること
とかいふ。君とほ内侍士の冷煙の好敵を
あつたか、流石に割と就てい君の一目を内侍
士に携い比の親かあう、君が沙かおのマリベス
譯すると侍士に校訂を求めた。見のほ内侍
士かまの義おの別荘に長え比の侍士、
マリベスの譯を著し、時どあつた。
侍士の自分も同じものを譯せん

念の為め、外君の譯本を原書と較べ
て精査し比結果の然るうとすのて示す比のを見
ると各頁難黄に満ちてある。一教を學ぶやう
其時時、自分あ氏の譯し方がどのやう
な事か、切りに、試みるマリベス夫人の獨修の
書を讀み較べて見比のと請求し、自分の路の君
の譯本を用くき、一修一修侍士の自譯を後
まゝ、この較べて見比、全然味の異なるもの
亦一教を學ぶに、流石に、解屋が
ある、如く譯が精確か、
に大なるヒラキがある。割
侍士も一着を熟すことを得ると感比。

田原榮 補 君の執誠の人が事々感激すると
泣き出すこともあつた。何人の折々あつたか、早
稲田の教職員も生を奉げ提燈行列
をやつて、官城前ニ集會し、此時に萬々近
い大衆が一齊に所願、壽萬歳を絶叫し
此の時、君の感極するを泣き出し、この
此の時の事であつたか、口内傳士の追
憶記の内、左の記事がある。

只一の今尚ほ忘れらるゝ一寸し、此ことが
あふ、まゝいぬ流二十二年の空急法、是布
の日のことであつた。御承知の如く此前古
未嘗有の盛典を祝賀し、さうといふの



が我が寺の宗の教職員も始め
全校の生徒と奉つて、お茶騷きを押し
し、まゝいぬ流二十二年の空急法、是布
を擡つて、さういふ大八車か何の上へを
いつと押して、さういふ山車扱ひ、さう
一齊に祝歌を奏し、さういふか、其祝歌
ハ私が此の如く、教職員も、年俸つ
て、押して、さういふ、堀端を練つて
行つた。さういふ、母、中、さういふ、
つて行つた。さういふ、右の大旗を掲げ、さういふ、
大旗の頂上、道、旗を掲げ、つて架
つて、此電線、さういふ、さういふ、旗が

其線に絡みつい比。サア二進も三進もさうさうさ
 つ比。ほんのちしはわりのこと。これかめれ終み
 つ比。為め、無理に押せば、丸太の頭と
 之れとで電線が切れさう比。大勢が只とい
 くとき騒ぐはめりい。い。う。七。う。う。ぬ。と。忽ち洋
 服姿の一人の男が、車の上、躍り上つ比。見。向
 比。太い旗の棒に丸太に比。手を掛け、マ
 ドロスが帆柱に上ると、その格好、死と七猿
 猴の如きとい行かぬか。えつちらおつちら。樹木が
 はしめれ。見ると、まんが田原辰次郎の比。ま
 生連の二齊も教うを揚げて鳴来比。既
 して首尾よく登り遂げ、終み附い

藤原

ちか。旗をけし。やめて丸太の尖をもや
 や斜。う。う。う。電線をく。ら。大鳴采
 の裡に、又さうくと車上。降りま。一行
 の更に祝歌を奏しつれ。目的の地とて
 進行し比

こん。後。さ。送。る。程。の。吉。む。り。ま。い。や。り。妙。が。田
 原。辰。次。郎。の。湯。原。の。平。太。と。欲。打。事。
 臨。人。が。い。か。る。若。々。しい。元。氣。が。あ。つ。比。と
 り。あ。こ。も。い。い。ざ。と。い。の。時。さ。い。衆。も。先。ん
 び。身。を。振。り。い。ん。パ。ル。レ。イ。グ。ル。に。さ
 こ。あ。ら。う。と。い。ふ。鋭。い。氣。概。と。も。鳴。声。を。い
 る。逆。吉。と。思。ふ。あ。ら。う。流。し。添。く。て。お。と

田原菜 再補 田原の横濱に自家製生地の漆
器店を開いたのは、結局失敗と帰して不幸
なことに、この火災まで手傳つて、南島全
島を有る物とした。君が横濱の南島
しーがし南島を扱ったのは、其後ひの
と、思ふが、其の廉潔の人格から、此の南島

入つては博覧強記と而然として許せえである。こ
ゝにミシヨンを如何なる場合も取つたことか
く、尚今も主い切つてそんを不審に思ひ
ひつたことかある。君の法廷の失敗は多
くの夏賦を有ふた。多の債権者、高利
貸のあつたが、此の債権者君の人格に
服したものである。君はとんちや、窮乏して成
許かの借金を持ちて、債権者も有体の事
情を告げても、利子も是れ多の僅かの金を
差入ることを怠らうつた。私が大さの
の用は北海道の札幌に出張した時、君の
用は商人の用に出づけておいて、偶れ回



一説に、解任した。君の家を訪ねて見ると、
と、高崎の家に、然としておれ、私
明が塞かつた。私、君の境馬に、口を塞
せ、早稲田の復帰と、徳通したの、此時
に、あつた。然、尚復帰する、ことある、
である。

海科の

高根義人氏、早稲田出身であるが、帝大に入つて更
に研習し、外田早稲田の、外田早稲田の、
早稲田の法科を、長い間教授した。後、亦
護士として、此界の相立の名を、得た。君の
身体が、癩で、頭腦が、明敏で、
神性衰

過日敬の
弱し陸りともま人があつた。昔々鐘今も日住し此関係
から日身身愛児が海流にお成中波に
後ん不幸があつて君の神往を鏡まて此神
往の死後を回こつてある。あつたか長唄のうたを
せう出し。此が、りて、盗死を遂ぐるの不幸
神往後を家から取つて、その原因未だ知らぬが
恐く神往衰弱の陥つたのよまらう。

小千川豊次郎氏は早稲田の初期は行泊を教
へた。此人はどこの人か。帝大出身。其の比やと思
ふ。矮少の人であつたが、映潤の資を備へた。私に此人
に就て思ひ出す一事は、嘗て衆議院議員の候
補者となつたことである。君は学校を教くゝ来て、
教員を以て選挙法にとやつた。君の云ふのは五
百圓の金があつた。選挙に出ると云ふから、其の
乗り出された。此の指の帯の勘か、この中へ自分の
貯蓄を以て金が全部入つてゐる。毎日の金を
出さ、その金が随分お積りなると云ふ。私
に我らに、そのカバンの許可の金があるか、
と云ふのが、問はるゝ。定まるゝと云ふこと云ふと、

藤原製

君の毎日の金のきとさう、えんご、ことゝの約束が五百
圓だ。此のカバンを空にして、自分の生活が出来ぬと
云ふ。そのも単純であつた。君は自分の笑つた。其
後十数日経て、登校した時、君は特々、自分を
拉して云ふ。選挙運動の恐ろしきことだ。前
面白あつた。云つた。やうな。さうか。カバンがからま
さうだ。と云ふから、君は、さういふ。當分の事だ。あ
つた。出させらぬ。極まつてゐる。統制の無い
金まが、出た。さういふ。君は、用心して、後と云ふ
と、君は、選挙の事。君は、選挙の件。君は、
印掬ひであつた。

大日鞠二氏ハ宮内省の御歌所ニ奉仕す。傳々早
稲田の文神ト教へ此ことがある。君の和歌を美しくし
亦書と美くし。君ハ貴之の書と字人の歌集
品が寛かつた。君ハ上代の古墨蹟の研究ハ半生
と傾けし。斯道ハ造詣ハ深く、鑑賞ニ於てハ第一

人者と云ふに。左来筆の関所を以つて任してわに古
筆の極めは多く君に據つて破毀せし上代の墨
蹟は君に因つて初めし明燈を得た。君の門下よ
り尾上紫舟のことき古墨蹟の鑑識家の出に
のち君の功として稱へぬべきは、三十六人家集
を本乾寺の寶庫深く搜り出しし世に現はし
るのち君の功は、多筆者に就て考証を下し、
平安朝の墨蹟に明りも通じたるも赤尾の力である。
君は和歌の道も如何も忠實の人のあつた。君
の門人に對する安んずるに、其の門下に數對して
ハ試み行届へたものあつた。私に於る時京都に流
んじ、數日君と縁談を回ししことかあつた。君

藤原

の言を訪ひ来り人の多く門人が殊に世流が多かつ
た。夜間を過し夜の深けるまで、君は琴と相争ふ
和歌を詠じし歌をなしてやつさう子と教へに
りし。世も倦み本如何も懇切のしるべき事。
如何なる時にも倦む事なき、宛分る自ら
も樂しむことくびあるのを眼のあやうく流石
にと感服ししことかあつた。此の京都滞在中、保
澤川(又舟橋)を渡りし時、君と自分との多くの女
流の人も加はつたが、船中むすし即詠をなして流
石に教へる所かあつた。君は石碓屋の人の一向邊懐を
飾りしつるに對してもあやうくをかいて詠すと云ふ
態度であつた。自宮内省を仕の歌人として

不似合の態に比か、あかしの人相手入時の移るを
知らずしてさむの親しみ得るの此の氣味ある
態度にあらざればと思ふれ。

去田秋濤補 去田秋濤ハ甲辰年受ちん侯に
迄つて改羅巴迄を訪ふに際し往々の邊り
もあつた。是を一日語り傳へむらふ。是の況
船中の無聊を慰めるに、秋濤ハ那ボレラ
ンの口マンスを原方から後人ご度をもとこはせ
比、是の後、是の勅のまゝと譯して出候
し、此の志のナボレラオシである。秋濤の是を
とちん、ダラシの、まゝはあつて、彼の傳

其年西海の暴風も秋濤の終に極がとちんて
料理をいり給米危むる西をいりも去田比と
まゝと御免を蒙るやうなまつた。斯る不し
だらうの長田は、あつたことのある、あつたこと
敷をいり給田の、開いたことである。その敷を
ハ、空敷と名づけし十ヶ條付あつた敷を
則か定めてあるのが、古の早稲田の敷の
雅敷にうつしてあるのを、是の早稲田の
の敷と連絡を保つて、是を生を監視しつて
守り宿せし、あるまゝある。是の果あつて
事定成つまつたか、あつたか、事定成ら
まゝか、ちんぶらうの、まゝの、監視も

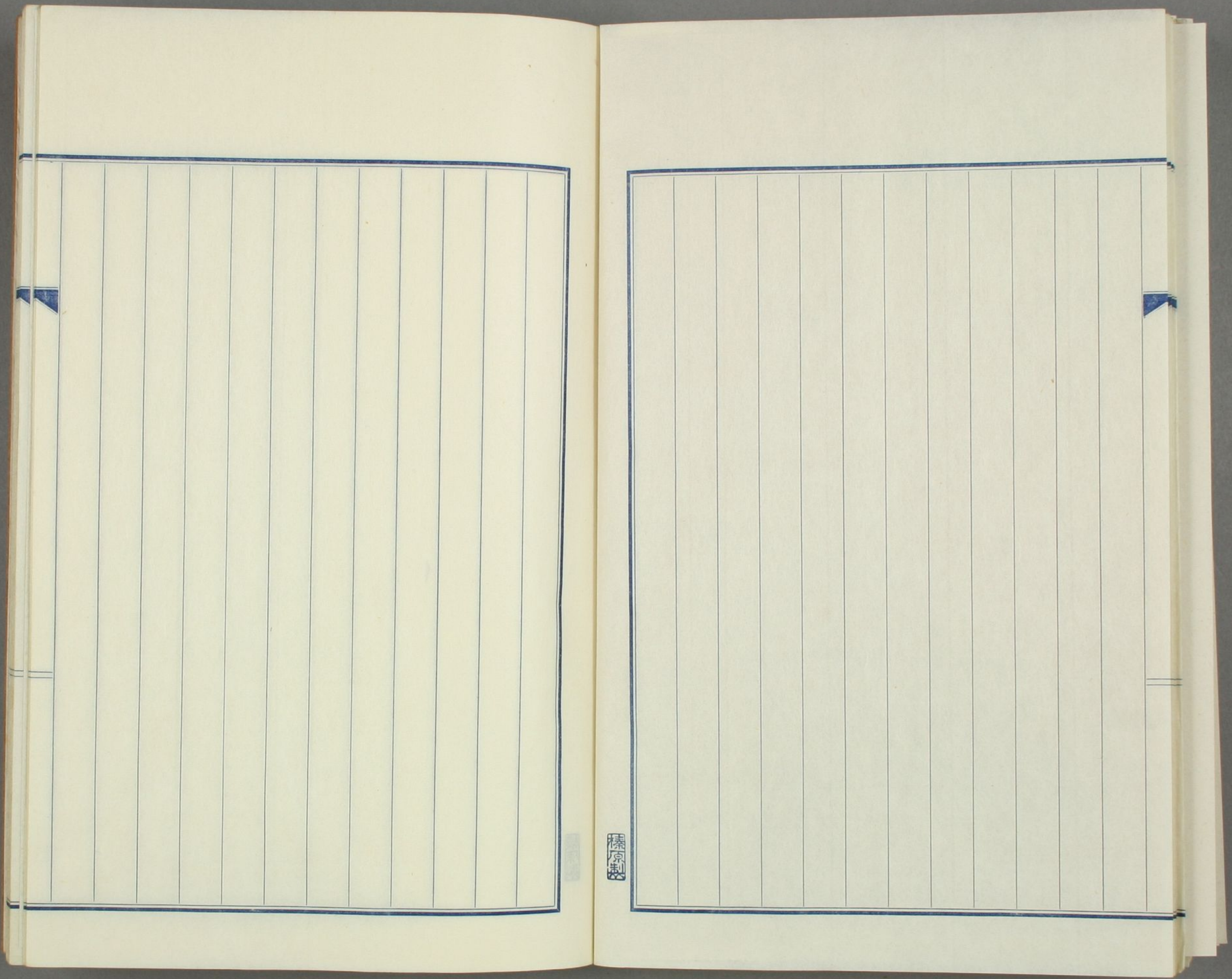
宿のやうなよきものを毎日も任憑しることが
あると思ふと、滑秋方の感るべきを得る。

三宅恒徳 神

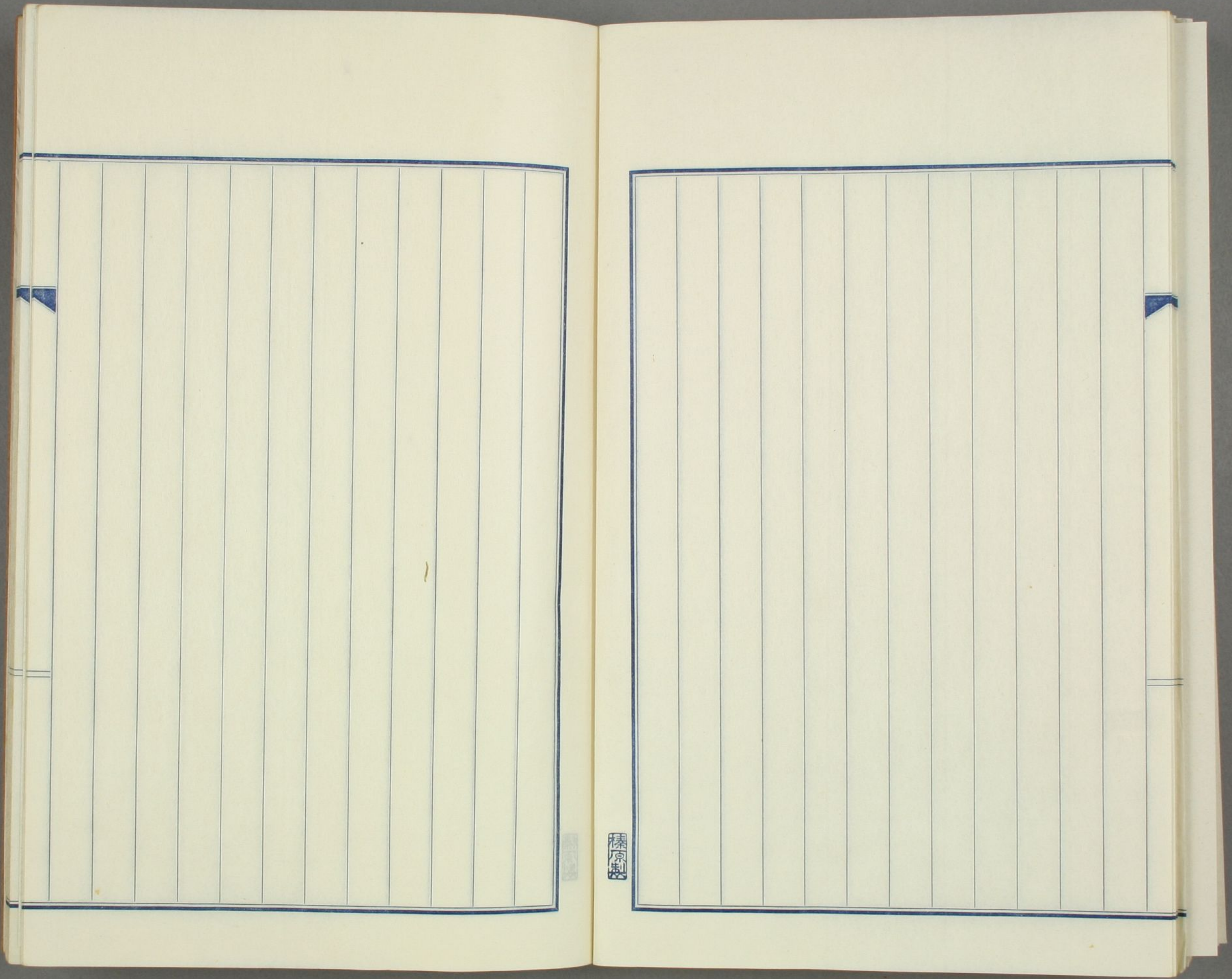
早稲田の早い頃より兄才同士で教く
る末兄の才三組あつた。是の天竺見才(為之
喜と助五氏)有賀見才(有権長文五氏)
三宅見才(恒徳唯次才一五氏)此の長折
しにのい有賀有権三宅恒徳の二氏も
三宅恒徳氏の教をよみける人から聴いた話
に、ある時の試験に問題二十出された
が、あまの才の偉むに一時間で二十の問題
に親も答案を作ること、不可能にして甚



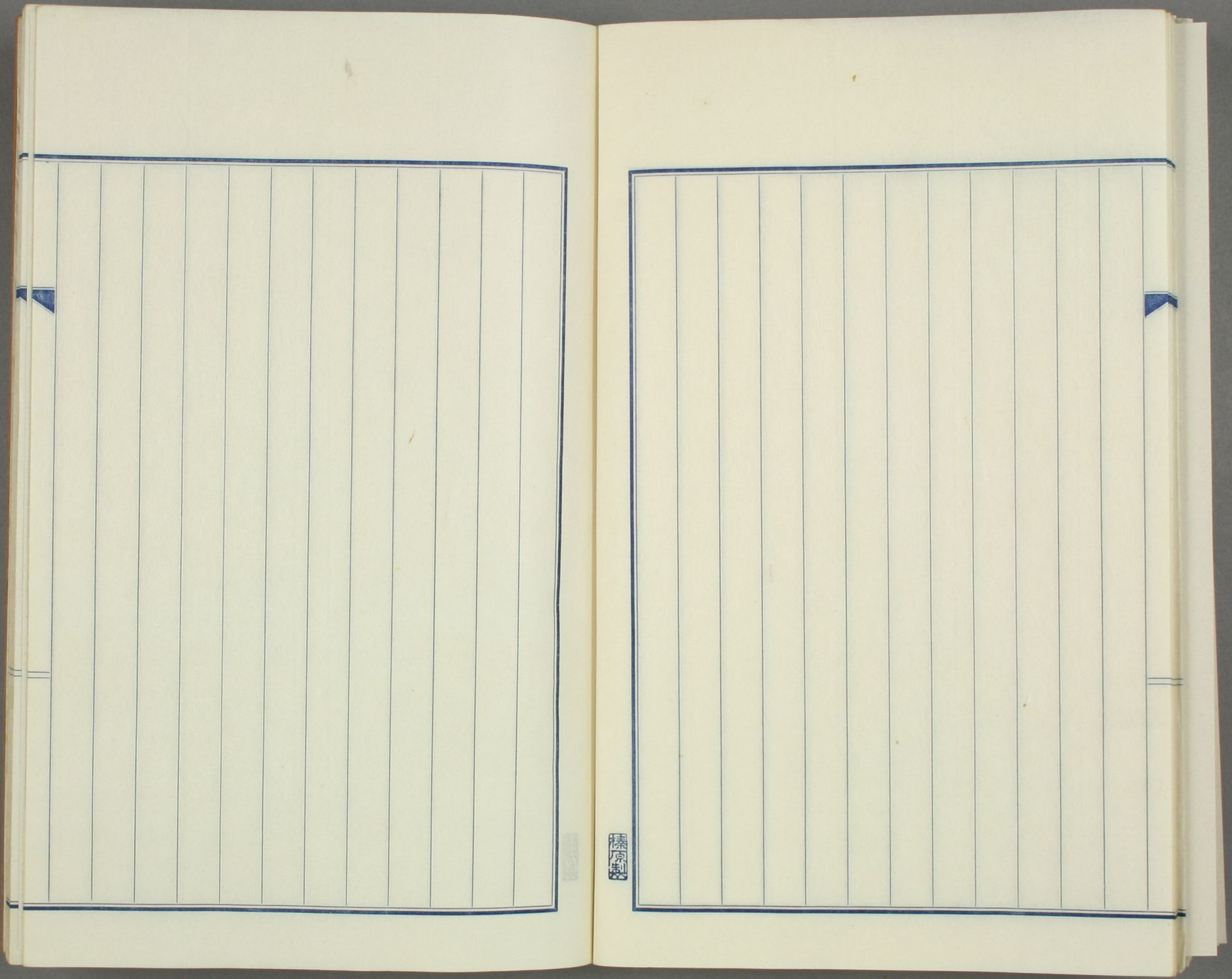
物を鳴らすに、三宅氏の云ふに、此問
題の数の多いが、アイ、ノー、(可貴、
ハ不口)と書けは、是れは答案の多きものと
云ふに、先づ一掃せられた。三宅氏の亦
スペインサーの代議政体論の譯漢を
受持つて、学生が、理を、と、原稿
が、後まじることと例として、氏の云ふに
原稿の後又向合の其人のが意味が、
つて、おの、か、否、や、の、自、分、に、判、断、か、つ、と、云
ふ、れ、と、云、ふ、か、氏、の、教、授、法、の、特、徴、か、あ
つ、れ、と、思、ひ、ん、る。



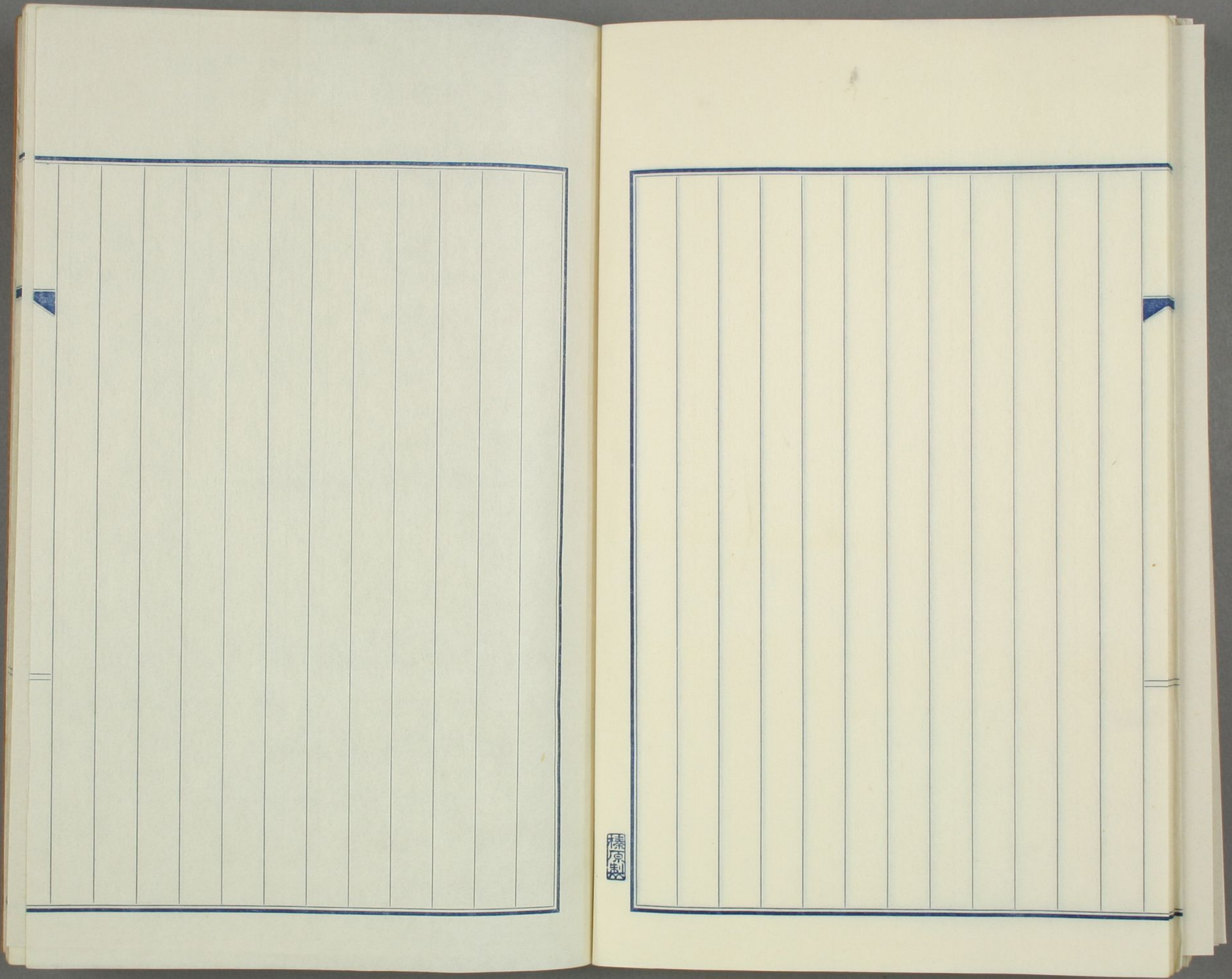
Small, faint stamp or mark at the bottom center of the right page.



東京製



東京製



泰和

松
 櫻庭
 松南
 三心
 松垣
 名山
 重山
 前山
 加山
 手山
 酒井
 藤井
 本田

大隈 羨
 小野 梓
 南部 英磨
 前島 密
 鳩山 和夫
 三山 五吉
 山田 一郎
 山田 喜之助
 三宅 恒徳
 田原 栄
 小川 為次郎

~~山口 坂本 東 藤 依 三 前 山 松 山 井~~

大西 祝
 和田 通三
 志賀 重昂
 有賀 長雄
 高橋 泰木
 重松 安輝
 留山 他
 久米 邦武
 田根 福次郎
 嶋村 流吉
 中島 半三郎

菊池三九
股野時中
奥田義人
宮松冬夫
信夫泰
夏目金之助
関根正五
根本通
去田東伍
増子善一
田中唯一
東儀季次

巽来治
長田忠一
谷 清
森 樹南
破部四
ラフカテオハン
スタインレー
ロイド
伊藤悳次
村山重義
前田慧雲
村上専祐



横井時冬
鈴木宗言
池田龍一
高橋立中
母甲乙次
山田俊三
本甲一
梅湯次
土子金四
伊藤善長
吉川義次

前田秀村
前田 実
佐久向行基
今井誠大
増田 義
坪井正五
岸十三
三島 毅
穂積 隆重
三島 竜
本多康直
内田 銀祐

南條文雄

板垣退助

七ノル又

谷田益盛

日豊中

吳文聰

ゴルトン夫人

中野武吉

竹内の大

加藤高野

早速惣斎

上速中

田中光三

前橋春義

梅原誠吉

井井耕一

酒井雄三

田中光顯

宮倉久三

井村忠雄

井上春

秋元重之

高山林次

杉谷清花

以上九十

印生石存者三付控除

森路

千嶋精一

吉田巳之助

大口勲二

北留流彦

森井健治

温洋采一

松本三

高根義人

小千川豊次

宮井安吉

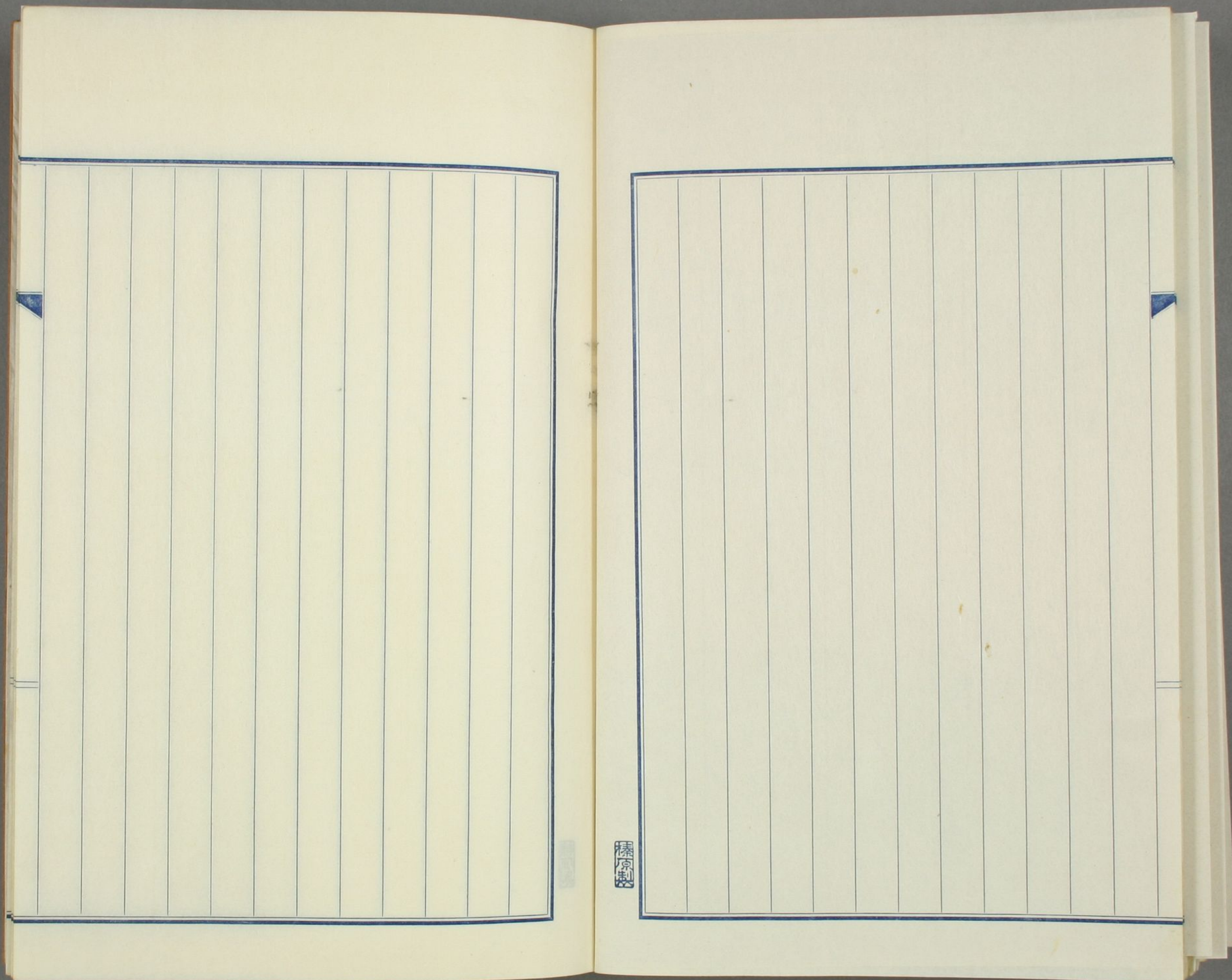
井田通三

山田文次

山口剛

本田行教

松本雄俊



標原

以下
3丁
白紙



宋 赤 繪 小 皿

